
君の知らない物語

aoha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の知らない物語

【Nコード】

N9115I

【作者名】

aoha

【あらすじ】

西尾維新原作、『化物語』の二次創作。

もしかしたらあったかもしれない、『もし（IF）』物語です。

原作ではあまりに切ない思いをした羽川さんを幸せにしてあげたいがためだけに書きました。

基本的に、阿良々木くんと羽川さんしかできません。

私の、この想いを（前書き）

西尾維新原作の『化物語』。その二次創作です。
羽川翼と阿良々木暦の、あったかもしれない物語です。

私の、この想いを

「ねえ、阿良々木くん。私と付き合ってもらえないかな」

羽川は割かし真剣な顔でそういった。かといって、いつもの真面目顔ではない。少しだけ頬を赤らめて。うわ。超可愛い。

でも、それはあまりに突然、突拍子のないことだった。壮絶なゴールデンウィークが明けて早々、それも早朝の出来事だった。

「えーっと、買い物かなにか？」

「ううん。これは 私からの告白だよ」

羽川翼はトレードマークの三つ編みを揺らしながら、そうのたまった。

心なしか、彼女には焦りが見える。日常を完璧に演出し、演じられる彼女が、僕にでも察せられるような弱みを見せている。

「何か、あったのか？」

何か。それがどうしようもなく不安になる。何もかもが想像とか憶測でしかなく漠然としたものでしかない、それがたまたまなく不安だった。

「ううん。阿良々木くんが心配するようなことは、なにもないよ」

じゃあ、どうしてそんなに不安そうなんだ。なにを、焦っているんだ？

「怖い」

唇を引き結んで、羽川は言う。怪異が、ではない。戦場ヶ原を恐れているのだと。

「怖い　つて…」

羽川は戦場ヶ原に対しては友好的、かどうかはともかくとして好意的だったはずだ。確かに、彼女のリアクションは一般人の許容できる範囲からは大きく逸脱しているだろうが、それに臆するような羽川ではない。

「戦場ヶ原さんに、阿良々木くんをとられるのが　怖い」

「は？」

「阿良々木くんが悪いんだよ。誰にでも優しくするから。命懸けで優しくするから…悪いんだよ」

「……………」

「私は、そんな阿良々木くんだから好きになっただけ…だからこそ、怖いよ。」

私は阿良々木くんの特別じゃない。戦場ヶ原さんも、特別じゃない。

でもね、阿良々木くん。私たち、ううん。私にとって阿良々木くんは特別なんだよ？きつと、戦場ヶ原さんも、そう」

羽川の言っていることは、必ずしも正しくない。僕にとって羽川は特別だし、戦場ヶ原も特別だ。いや、ある意味、みんな特別だ。

羽川は羽川で、戦場ヶ原は戦場ヶ原で、八九寺は八九寺で、忍野は忍野で、忍は忍。みんな、それぞれに特別。僕の交友関係は、カテゴライズするほど広くはないし、多くもない。

でも、そういうことではないのだろう。羽川が言いたいのは、多分そういうことじゃない。

「だから、ねえ、阿良々木くん。私と、つきあってください。

私を　　阿良々木くんの特別にしてください」

僕は、羽川の言葉を現実として受け止められないでいる。

ついていけないで、いる。

羽川は言った。告白だと。

羽川は言った。怖いのだと。

羽川は言った。戦場ヶ原ひたぎに、僕をとられたくないのだと。

「……………っ!!」

なんて顔をしているんだ！ 今にも泣きそうなの？ いやいや、困ったような……。いろいろな感情がないまぜになつたそんな表情。

今までに、見せたことのない表情。

いつもの笑顔で言ってくれたのなら、いくらでも冗談を返して上げられるのに。いつもの超然とした羽川の姿は、そこにはない。普通の、女の子と何も変わらない、自信のなさげな不安に満ちた瞳で……僕を見ている。

いつもとは正反対の羽川。それがたまらなく可愛い。普段から隙のない羽川が、とても脆く儂げだ。

やばい。

すごいやばい。

抱きしめてえ！

抱きしめて、耳元で大丈夫だと囁いてやりたい!!

人が本来的に持ち合わせている庇護欲をピンピンに刺激してやまないのが今の羽川だ。

しかし、しかしだ待つんだ阿良々木曆！嬉しい気持ちはよく分かるが自重しろ！

「私は　ズルい女。私が今、何考えてるかわかるかな？

どうやって阿良々木くんの逃げ道を塞ごうか。どうやって阿良々木くんの気を惹こうか。そんなことばかり考えてる。

今、こんなことを阿良々木くんに話してるのだって、少しでも私を見てほしいからかもね」

どっちだと思う？なんて、羽川は笑う。泣き笑いのような表情…きつと、どんな顔をしていいのか分からないのかもしれない。

「でも、でもね

……私は、私には、なにもないけど　私、羽川翼は、阿良々木曆くんが大好きです。

私の　特別になってください」

ついに、涙が零れ落ちる。羽川の涙。

不謹慎なことではあるが、僕はその涙をとて美しいと思った。今まで、見てきたどんな笑顔よりも、眩しくて美しい。

言葉を口にするのが精一杯で、表情にまで気を遣っていないのだろう。だからこの泣き笑いの笑顔は、僕が知っているどの笑顔よりも、心の裡を表しているのだと思う。壊れかけた、儂い美しさ。

「羽川っ！」

僕はもう、自制などかなぐり捨てて羽川を抱きしめていた。
限界一杯、ギリギリのところまで踏みとどまっている。暴発寸前、
そんな印象を受けた。

「僕は、僕はっ」

僕は、間違いなく羽川が好きだ。錯覚でも倒錯でもない。厳然たる事実として羽川が好きだ。

心のベクトルは限りなく好意に向いていて、メーターなんかとつ
くに振り切っていて計測不能だ。羽川が死ねというのならば、一瞬
の躊躇いもなく死ぬだろう。彼女がそんなことを言うことはありえ
ないにしても、僕はそのくらいの覚悟は決めている。

でも、その感情は春休みの体験が生み出したものだ。

春休み、僕が朽ち果てようとしているところを羽川に救われた。
そのとき、彼女がいなければ僕はもうここにはいない。それだけじ
やない、どれほど彼女に救われたことか。だから、僕の羽川に対す
る好意は何があっても揺らぐことはない。

しかし、この場合は違う。根本から、違う。

僕が羽川に抱いている好意と、羽川が僕に抱いている好意は、違
う。どれほど僕が羽川を好きであっても、その一番深いところに根
ざすのは春休みの出来事で、それを羽川の「好き」に応えるのはあ
まりにも不誠実に思えるのだ。

「それでも、いいよ。」

今は、それでもいい。

明日があれば、明日の分好きになってもらえる。

明後日があれば、また明後日の分好きになってもらえる。

阿良々木くんは優しいから、きっと誰かを振ることなんてできな
いと思うんだよね。

後からいくら頑張っても、勝てないから。今、勇気を出して言い

ました。

今はどう思っけていても、私を好きでいてくれるのなら、それでいいの。

恋人でいてくれるのなら、未来はずっと繋がっているから」

ね。なんて彼女は笑う。屈託なく、笑う。

それはおよそ僕の想像するところの告白のイメージとはずいぶん異なる。恋人同士、というのは相思相愛が大前提じゃなかったのか。なんて、そんな気分。そんな状況。

それでも、今。僕の腕の中にいる少女が、全てを理解して、全てを受け入れた上で、最大の勇気を振り絞って、気持ちを伝えてくれている。

どんな形でもいい、私を好きでいてくれるのなら、恋人になつて欲しい。そうしてくれれば、あとは私が惚れさせてみせる、と。

ははっ。自信があるのかなのか。ある意味、羽川らしいかもしれない。僕の考えを読みきった、その上での告白。そんな印象を受ける。

もしかしたら、さっきの表情も涙も、全てが計算された演技なのかもしれない。そう、見せかけるための演技。

もしそうなら、最初から僕には勝ち目なんてない。なにが勝ちで、なにが負けかなんてわからないけれど。

逃げ道なんてどこにもない。逃げるつもりも、またないのだけど。演技かもしれない？ だからどうした。羽川が僕を好きだと言ってくれているんだ、それだけで十分だ。たった、それだけで僕は天にも昇る思いなのだから。

「羽川」

「うん」

「そこまで言われて、断れるヤツは男じゃないぞ」

「うん……」

「……どうぞ、よろしくお付き合いください」

好きだ、とは言わない。言っても嘘にはならないけど、それでは僕が納得いかない。今の好きは『Like』や『Dear』の類であつて、『Love』ではない。だから、今は言わない。でも、そう遠くない未来に言うことになる確信はある。

「ありがとう。どうか、よろしくおねがいします。暦くん」

「へあつ!?!」

「? どうしたの、暦くん」

「ほあつ!?!」

「暦くん?」

「ほあちゃー!?!」

「暦くんって、時々おもしろくなるよね」

さっきまでのいいムードぶち壊し!

羽川はくすくす笑ってるけど、僕はそんな彼女を腕の中に収めたままで奇声を発している。明らかに、紛うことなき変人だ。ていうか羽川さん。二回目あたりから、わかってやってやがりますね?

「うん」

あっさり認めやがった！

「変かな？ 名前で呼んじゃ、いけないかな」

「うぐっ」

正直なところ、僕は名前で呼ばれるのに慣れていない。曆と呼ぶのは両親と、我が妹たちくらいのものだ。なによりも僕には壊滅的に友達がいらない、意図的に友達を作ろうとしてこなかった僕は絶対に経験が足りていないといえる。別に、曆という名前の響きが女っぽいからとかそういう理由でないことを殊更に強調しておく。

それはともかくとして。僕も変わるべきなのだろう。いや、もうすでに羽川に出合っただけは劇的とも言えるほどの変化をしたわけなのだけでも。それでも、まだ、変わるべきなのだろう。おかげで僕の間強度は春休みからこっち、垂直降下にも近い低下っぷりを見せている。僕の予想ではこれからも益々脆弱に、虚弱になっていくことだろう！

でも、それを嘆かわしいとか、もう一度人間強度を上げようとかそんなことはもう思わなくなった。それどころか、人間強度なんてつまらない考え方をするのを止めた、というべきか。

鎖国から開国へ。

僕にとつての黒船、羽川翼によって阿良々木曆は開国した。とてつもなく強圧的で友好的な手段で。

傷つけることを覚悟し、傷つけられる覚悟をした。全てを受け入れて、受け止める羽川の強さには遠く及ばないが、それでも共に歩く第一歩になれば……と思う。

強引にも、僕の内側に踏み込んでくれた彼女に歩み寄るため

の 第一歩。

「……羽川」

「なに？ 曆くん」

「…っ！ か、肩を 肩を揉ませてもらえないだろうか」

勇気を出すためのおまじない。 同時にチキンの証明でもあるのだけど…なんというか、はじめと言うか、そう。儀式めいたものだ。

「 胸、じゃなくていいの？」

恋人同士なら、おかしいことではない。でも、これは恋人としての阿良々木曆を始めるための儀式。だから、肩じゃないといけない。ちよつとイタズラっぽい微笑で誘う羽川の言葉にM8・0級のぐらつきを覚えるけれど、ここは男として負けるわけにはいかない。

「肩でお願いします」

思わず丁寧語。情けない！

「そ」

じゃあ、と言って背を向ける…といっても羽川はまだ僕の腕の中なのだけでも。

いや、なんというか、やばい。

自分で「肩」と言ったくせに、抑え切れないほどの劣情に苛まれる。

なんだ、この新手の拷問。一時の至福と、羽川の信頼。どちらを取るべきか、考えるまでもなくらい明白なのに、精神を揺さぶる激情、突き上げてくる衝動に僕は翻弄されている。嵐の大海に漂う小船のごとく！

「恥ずかしいナレーションはいいから、早くして」

好きに、して。

うなじまで真っ赤にして、俯いてしまう羽川。

なんだ、この女。

どうして、こうも僕に対してクリティカルなリアクションばかりをしやがるのか！

だめだ。

これ以上は、僕がおかしくなる。

震える手で羽川の肩に手を置いて、薄い肩を掴む。一呼吸おいて、そっと揉みはじめる。といっても大した手ごたえがあるわけでもない。そうしながら、僕は心を落ちつける。肩を揉んでいる間は、破廉恥な、信頼を失うような行為に及ぶ心配はない。…別に、妄想で脳内置換しているわけじゃないからなっ！

「チキン」

ぼそり。

羽川が言った。あの切羽詰った春休みとは違う。緊迫感はある意味近しいものがあるけどな。

でも、あのときほど追い詰められたわけでも、逃避行為としてでもない。

でもでも。もしかしたら、もしかしたらだけど。

あの時、羽川は期待してくれていたのかもしれない。

全く僕に都合のいいだけの妄想だけど。
もしそうだとしたら。

この咳きは。

どこまでも公正で明大。残酷なまでに平等で優しい羽川の、全く飾らない本音なのかもしれない。

いや、まあ。しかし。

そう言われても仕方ないと言える。僕にはまだそこまでの勇氣はない。

でも、待ってもらおう。僕が羽川に恩がどうか、考えられなくなるくらい、理屈抜きで、感情だけで思い切りぶち当たれるようになるまで。

それくらい、好きになるまで。

そんな自分勝手な想いの謝罪も込めて、念入りに、丁寧に肩を揉み解していく。

「んっ」

一箇所だけではなく、肩周りの筋肉に沿ってスライドさせながら、丁寧に丁寧に。

「んんっ…」

横スライドだけではなく、縦にも、マッサージの範囲を広げて、揉みこんでいく。

指だけではなく、手のひら全体を使って。

「あう…ん」

実は、ここだけの話。両親を相手に肩揉みの練習をひそかに重ねていたのだ。あの春休み明けの運命が変わった（僕主観）日に。次

は必ず気持ちよくさせてやる、と言ったあの日から。

その日々たるや過酷、壮絶の一言に尽きる。両親からは気味悪がられ、勘繰られ。妹たちには余計な詮索と詰問を受ける始末。しかし、思い返してみれば日頃から忙しく働いている両親と話す機会にもなり、肩揉みの腕前も上がり（両親は変なところで好みに煩い）、喜ばれもしたのだからそう悪くなかったかもしれない。プラスマイナスゼロ、といったところだ。

そして今。その成果が発揮されている。

「ん〜」

蕩れ羽川。

春休みの時には全然凝ってなんかいないじゃないか、と思ったものだけれど、今はそうでないことがわかる。

普段から姿勢を正しく保ち、運動をし、食事のバランスに気を遣って、たっぷり休息を取っていたとしても、身体のどこかには負荷が蓄積するものだ。それこそ、僕のような身体でもない限りは、柔らかいな、とかそんな感触の中に確かに存在している凝りを、今の僕には解してやる事が出来るのだ！こんなに嬉しいことはない！

「…ッ！ 曆くん」

ああ、これぞ至福のとき。僕の天職はまさに羽川専属のマッサージ師に他あるまい。

「曆くんっ！」

がしっ、と。

手首を掴まれてはっとする。

そしてそのまま。手を、引かれる。

羽川の背中に抱きつくような形で、女性らしい柔らかかな身体に密着する。驚きの声を上げる暇もなく、強く引き寄せられて。

「は、羽川？」

「曆くん」

羽川の声がすぐ耳元でする。

「は、はひっ！」

っ！ 噛んだ。噛んじまった！

手を掴む羽川の力が俄かに強くなり、より強く羽川に密着する。

うわ、うわ、うわ！

やばいやばいやばい！！

胸元を感じる羽川の背中とか、腰周りに感じる羽川のお尻とか？！

「あんまし気持ちよくすると、襲っちゃうかもしれないから、気を付けてね」

聞き覚えのある、妙に優しい猫なで声。

瞬間。

春休みの恐怖がフラッシュバックし、心底肝が冷える。

浮ついた思考なんて一瞬で消し飛び、記憶から抹消されるほどの衝撃。

羽川の肩越しに、視線だけで見たその横顔はまぶしい限りの笑顔だったのだけれど。

眼が、笑っていなかった。

光の反射の具合か、はたまたホンモノか。

金色の瞳に、縦に長い瞳孔をもつ、肉食獣の瞳。

猫の瞳だった。狩猟者の、眼。

夢とも現とも判別がつかない。でも、なんというか　美しいと感じた。

多分、この美しさは戦場ヶ原と通じる。羽川をして、惚げで美しいと言わしめた、その美しさ。

そして、二度と真名を呼ぶことのない金色の美しき吸血鬼。その、美しさ。

この世と、隔絶した美しさ。

隔絶か。

もしかしたら、羽川は他人というものを基本的に信じていないのかもしれない。羽川が信じているのは、個人のパーソナリティや能力ではなく、各人の個性と状況から導かれる行動の予想・予測ではない。絶対の自信　　自分以外に頼るものはない、と信じているのかもしれない。

自分とそれ以外の人間、その他大勢に区別はない　　ハートア

ンダブレードに僕と羽川の区別がつかなかったように。

戦場ヶ原に、敵が無関心な空気であるかの二通りしかなかったように。

羽川の瞳にはそう思わせる何かがあった。こんな距離にいなから、僕は映っていない。

人間不信。根本的なところで羽川は人間不信なのかもしれない。

そして、そうと気付かせない　　自分も気付かない。

「……………っ!!」

寒気がした。

羽川に、ではない。

そんな風に考えてしまった、自分自身に。

酷く醜い。

「曆くん？」

「ごめん、羽川。今、僕は酷いことを考えた」

「そ」

下着でも覗き込もうとしたのかな？　なんて茶化して笑う。分かっているながら気付かない振りをしてくれる。そんな、優しい奴なんだ。

「翼」

びくり、と羽川の身体が震えた。
しまった。あまりに突然だったか？

いや、でも羽川も名前と呼んでいるし。それに僕たちはもう恋人同士。そして僕は羽川翼の恋人なのだから。

「だね。私たちは、恋人同士だもんね」

はにかむように笑って。照れくさそうに、笑って。

「でも、こういう場所（公園）で、いつまでも抱きつかれてるっていうのは問題だと思ふなあ。

あ、元々は私が出たんだよね。反省反省」

「名残り惜しいなあ」

いや、これは心から。マジで惜しい。

僕という存在はこののときのために　　の第二弾である。

「うん。暦くん、あつたかい……いや、でもホント。恥ずかしいから」

未練がましいが、惜しい。実に惜しい。

けど、僕たちは恋人同士だ。きっと、次もあるだろう。

そう自分を慰めて腕の拘束を解き、身を離す。

「ふう。危ない危ない。ちょっと、いい雰囲気だったね」

「そうだな」

そういつて、二人ではにかみ笑い。羽川の顔は心なし赤く、僕は火山でも噴火したような真っ赤な顔をしているだろう。

そりゃあ、当然というかなんというか。察して欲しいところだ。

いい匂いだったな、とか。

柔らかかったな、とか。

…なんだか邪な想像をするには十分過ぎるほどの『羽川』を知ってしまった。パンツも衝撃的だったが、これはこれで強烈だ。これから、いろいろ大変になりそうだ。

「阿良々木くん。いやらしい顔してる」

「は？ 見間違いないのか。ジェントルメンたるこの僕がそのような邪な想像をするとも？」

「阿良々木くん。口で言う割りに、行動が伴ってないみたいだけど。特に手が」

わきわき。

羽川の忠告の音が酷く冷たい。視線は氷点下。呼称も元に戻ってる！？好感度が下がっているというの！？

これは由々しき問題だ。告白を受けてから一時間もたたないうちに振られるなんて喜劇としては笑えてもリアルとしては笑い話にもならない！ましてや当事者は僕だ！

「あつはー。やっぱり阿良々木くんはおもしろいねー」

一転、いつも通りの笑顔。

「阿良々木くん、阿良々木くん」

呼びかけではない、ただ呟くだけ。

「阿良々木くん、阿良々木くん」

笑顔笑顔。なにが楽しいのか。名字を連呼されている僕としては羞恥プレイでしかないのだけど、それを言う勇氣もなく曖昧な微笑を返すだけ。

「阿良々木くん、阿良々木くん」

いかにも幸せそうな、眩しい笑顔がなければ僕はもうとっくに鋭いツツコミをいれているところだ。

「阿良々木 曆くん」

にへら、と。笑顔というにはあまりに締まりのない、ふにゃけた顔。いうなれば、蕩れ顔。

やべえ、鼻血出そう。

「やっぱり駄目だね。阿良々木くんを名前で呼ぶのは、ちょっと難しいや」

うにうにと、自分の顔を揉み解しながら、表情を元に戻す。…でも、なんだかまだちょっとにやけている。

もしかして、ずっと我慢してたのかもしれない。全くそれとは気付かせない羽川の精神力には全く恐れ入る。

「翼さん、僕からもお願いだ。何かいろいろと暴発しそうだから、しばらくは名字で… って、翼さん？」

硬直。

いつも余裕を感じさせる羽川が見事に硬直している。表情も姿勢もそのままに、時が止まったように。

「おーい、翼さん？」

眼を覗き込むようにして、顔を近づける。

目の前で手を振ってみても無反応。

まさか、名前を呼ばれるのもアウトですか、翼さん。

「あがつ!?!」

ほんの一瞬。鋭敏化した神経でも知覚できない速度で あるいは隙を突いて、羽川の両手が僕の頭をホールドする。

「ごめん、阿良々木くん。この約束は相互協定にしよう?」

「甚だ理不尽で不公平っぽい日米和親条約だけど、阿良々木くんは紳士だから分かってくれるよね？」

普段の羽川ではない。いつもは、どんな状況であれ、こんなことはしない。それくらい、切羽詰っている。ありえないくらい、取り乱している。春休みの下着のことなんかより、ずっと。

「お、おうとも？ もちろんだとも。一も二もなく同意するとも。さすが羽川、なんでも知ってるな？」

とんでもない砲艦外交。この上なく脅迫で締結された条約だ。

「なんでもは知らないわよ。知っていることだけ」

知っていたら、こんなことにはなっていないと思うな。と苦笑い。

「確かに、その通りだな」

ああ。全くもってその通りだ。

僕は笑う。まさか、羽川から戦場ヶ原のような扱いを受けるとは。

「全く、可愛いなあ！」

僕たちは、シユールな格好のままです。
笑った。

一緒に、笑った。

私の、この想いを（後書き）

読んで頂きまして、ありがとうございます。

この小説は、羽川さんに幸せになってもらうことだけを考えた、非常に都合のいい私の妄想で構成されています（笑）

原作とは似ても似つかぬシロモノと成り果ててはありますが、これからも書いていきたいと思っています。

ええ、なんとたつて、私は羽川信者ですから（笑）

タイトルはsuperceel『君の知らない物語』から一説ずつ。微妙にハズしてるかもしれない（笑）

短編小説で投稿していた『君の知らない物語』シリーズを一話完結方式の連載に一本化しました。以降はこちらで掲載します。

明かりもない道を（前書き）

『君の知らない物語』の第二弾！

二人が恋人同士になってからのお話。

時系列的にかなりすつとんでますけどね（笑）

明かりもない道を

僕は男だ。

名前が女つぽいとか、態度がなよつちいとか、そんなことは関係ない。

僕は男だ。

男の中の男、つまり漢だ。

そんな意味不明な上に情けない自分を鼓舞して、僕は頑張ることにしたのだ。

というのも、羽川と付き合いだしてからというもの『格の違い』というやつを見せ付けられることになったからだ。主に、成績という形で。

だからといって、羽川と張り合おうとか、同じ高みになんてそんな風に考える僕でもない。そもそも僕なんか敵うはずもない。

だが、しかし。だからといってやらないのは美しくない。

羽川と釣り合う男になろう、なんて大それたことは思っていないけれど、努力をしないのは美しくない。

そんな建前はさておき。

要するに僕は、気後れしているのだ。あまりに眩しすぎる羽川に輝かし過ぎる彼女に。

本当に大切なのはそんな外面じゃないのは分かっているけど、それではあまりにも情けなさ過ぎる。散々、情けないところを曝け出しておきながら何を今更と思わなくもないが、それとこれとは話が別だ。

僕は、羽川の隣にあつて恥ずかしくない男でありたい。

そんな想いを胸に。心機一転、不転の意思で勉強を試みたものの。二進も三進もいかない。二年間のツケは随分と高かついた。

早い話が挫折したわけだ。

そんな経緯をひた隠しにしつつ、マイラバー　羽川翼さまに、平身低頭御指南、ご鞭撻のほどをお願いしたところ、ご快諾いただいたというわけだ。

そして早速、放課後に図書館でマンツーマン（ウーマン？）のらぶどき勉強会（仮）と相成ったわけだが。

情けないことに、僕は今にも泣き出しそうになっているのであった。

特別難しい説明を受けているわけでも、戦場ヶ原よろしく言葉攻めされているわけでもない。

むしろ、簡単であるとさえ錯覚するような丁寧で優しいものである。物事の基本を忠実に押さえた上で雑学なども交えて決して飽きさせない。そのくせ、とんでもなく密度が濃かった。

「ここまででしょうか」

羽川がそう言った瞬間に一気に疲労が押し寄せてきたのだ。

頭が痛い…。

だが、決して不快ではない心地よいものだ。情報がオーバーフローしているわけではない、どちらかというと普段から使っていない部分を使ったような疲労感。筋肉痛の頭脳版だ。

「うーあー」

「情けない声ださないの。いい？　阿良々木くん。阿良々木くんが無為に過ごしてきた時間を埋めるのはとても大変なことなんだよ？　はつきり言って、こんな程度じゃ全然足りないんだから」

うぐ。反論の余地はない。はつきりくつきり全が無駄であった、無意味であった。

思い出すほどの出来事といえば、精々我が妹たちが中心となった

事件のいくつかが思い出されるだけ。そんな、挫折と鬱屈の日々。

「ほら、阿良々木くん。閉館だよ、早く片付けて帰ろ？」

「ああ」

言って右手の時計に目をやればもう午後六時。

確か、授業が終わってすぐ始めたから、約二時間半か。その間、超集中状態にあったわけか。そりゃ、疲れもする。

ぐぐつと、ひとつ伸びをして、手早く参考書やノートをまとめてファイルする。・・・って、凄い量になっていた。

学校の授業一年分くらいになるつかという量だ。

僕の身体が吸血鬼もどきのそれでなければ、腱鞘炎くらいにはなっていたかもしれないな。

「阿良々木くん？」

「ああ、すまん。すぐ片付ける。必ず追いつくから、先に行つてくれ」

「阿良々木くん」

「はい」

「テキパキ動く！」

訳の分からないボケは黙殺された。

「Sir, Yes, Sir!」

サーじゃないでしょ、もう！と呆れる羽川。

どうしてだろう。羽川を困らせることが、羽川を呆れさせることだけがどうしてもやめられない。なんというか。仕方ないなあ、とか。そんなリアクションをさせたくなくてしまうのだ。

ほら、好きな子にはいじわるしたくなる男の子がいるのと同じで、僕は羽川を呆れさせたい男の子なんだ。

と、そんな風に結論を出し、ひとり納得したところで。いそいそと荷物をまとめた。手早く、なんて言った割には変な考察をしていたせいでずいぶんと時間をかけてしまっていた。

「よし、帰ろうか」

「うん」

本当に呆れながらも、待っていてくれた羽川と連れ立って図書館を後にした。

「阿良々木くん、大丈夫？」

「ん。何がだ、羽川」

「信号。赤だよ」

静かな夜道。

横断歩道と赤信号。

阿良々木暦と羽川翼。

歩く男と止める女。

どうやら、信号に気がつかずに渡るうとしていたらしい。

車など通りはしない、どうして信号がついているのかも怪しい小さな道だ。

「ああ」

言われてやっと足を止める。

「疲れた？」

「かもな」

「じゃ、軽く復習したらすぐにおやすみだね」

「ああ」

短い沈黙。信号は赤のまま。

「今日は、あまり喋らないんだね」

「そっか？」

「うん」

「……」

「悩み事？」

「まあ、そんなところだ」

「それは、阿良々木くんに重要な？」

「なんだ。今日はやけに絡んでくるな。」

「いや、別に会話が嫌なわけなんかじゃ絶対ありえないんだが。いまいち、調子が出ないというのも確かだけどな。」

「かなり。いや、最高機密だな。これ以上は聞いてくれるな。お前のためなんだ」

「そんなこと言われたら気になるよ」

「お前の身を思ってこそなんだ」

「言っつてよ」

「ダメだつて」

「言っつて」

「だめ」

「言いなさい」

「だ」

「言え」

ぐすん。羽川が戦場ヶ原みたいだ。

もちろん、お互いに冗談のテイストをたっぷり含んでいるわけだけれども。……どうしても羽川の強気には敵わない。普段でも敵わないけどさ。

僕は降参して、胸の中にしまっておいた言葉を口に出す。

「いやな、羽川と僕は恋人同士なんだなあ、と」

刹那。羽川は目を見開いて驚きのリアクション。

そしてあからさまに肩を落とす。

「なあんだ、そんな事。びっくりした！。また何か大事件でも起きたのかと思った」

「そんな事呼ばわりされたこと自体が大事件だよ！？」

僕の身が大惨事だ！！ちょっとしたノロケのつもりがなんでこんな目に！？

「あつはー。ごめんごめん。」

そんな事、じゃないよね。不謹慎だった」

ふう、と一息。

「うん、そうだね。私と阿良々木くんは、お付き合いしてるんだもんね」

そう言って。

羽川ははにかむ。

照れ臭そうに。頬を赤くして。

そんな可愛い羽川に、逆にカウンターをもらって、慌ててとぼける。

自分で振っておいてなんです、耐えられません！

「そう。僕たちはどつきあいをしているんだ」

「どついでいい？」

「ごめんなさい」

速攻で頭を下げた。

羽川さん、その眩しい笑顔が怖いです。

ともかく。一方的にどつかれるのは勘弁だ。どつきあいをしているのは火憐ちゃんだ。過去にさかのぼれば旧ハートアンダーブレード 忍や、神原。つい最近では影縫さんだが……あれは、一方的だった。いや、火憐ちゃんるときも一方的だったな……。あれあれ、神原のときもそうじゃなかったか？いやしかし、一介の紳士として婦女子に手を上げるような悪行は避けるべきことのはずで

などと考え事をしていたら、何かが手に触れた。

柔らかくて温かい何かが。

きゅ、と僕の手を握る。

羽川の手だ。

僕を救ってくれた、神の手。

羽川なら「ただの、普通の手だよ」なんて苦笑するんだろうけど。僕にとってはどうしようもないくらいにゴットハンドだ。

その手が、今まさに手を握っている。

「なんて、いうかさ。

ときに女の子は、ふと誰かの手を握りたくなることがあるんだけど……わかるかな？」

ならないんだ？ ふうん」

ぐおおお。痛い、痛い！ 羽川さん、そんな目で僕を見ないで！！

「そつかそつか。阿良々木くんはそんな人だったんだ。私、誤解してたかも。」

阿良々木くんはそんな、誰にでもセクハラなんてするサイテーヤロウだったんだ……。

んん？ ということは戦場ヶ原さんも神原さんも千石ちゃんも忍ちゃんも……それどころか火憐ちゃんと月火ちゃんも、阿良々木くんの毒牙に……？」

おおおおお……。

羽川さまが。羽川さまが、呆れを通り越して悲しんでおられる！
というか一部は確実に冤罪なんですがっ！？

「んん。……仕方ないか」

額に手をあてて、大きな、それはもう大きなため息。

そして、どこか諦めと決心を感じさせるそんな目をして、羽川は言った。

「阿良々木くん。大切なお話があります」

ぱっ、と繋いでいた手を離し、僕と羽川は正面から見合う。

「阿良々木くんがそういうことに興味ある年頃なのは分かります。
戦場ヶ原さんみたいなキレイで可愛い女の子に触りたい気持ちも分かります」

ちょっと拗ねたように、そっぽを向いて。

「でも!」

向き直って対面。

普段は優しい曲線を描く眉を吊り上げて。

「私は阿良々木くんの恋人なんだから、そういうことは私になさいな。」

言ってくれば、ちゃんと相手するから。いい?」

僕の恋人は宣言なさいました。

いや。その。

なんとというか。

壮絶に誤解されている気がする。いや、正しくは将来の危険性という意味では正しいかもしれない。それっぽいことは何度かあったわけだし。

僕も健全な男子であるから(過去にさかのぼればエロ本を購入するであるとか)。はつきりいって美人比率の非常に高い。日々の生活に危機感を覚えるときもある。だが、僕にも一応の常識とか言うものは備わっているわけで本能に依らぬ理性部分では自制している。だって僕は羽川の恋人なのだから。

元々のチキン気質を否定しきれないのも確かだけど。

それはさておき。

しかし。しかしなのである。

「羽川。少し発言に気をつける。それは僕が誤解する」

「んん。誤解してくれても私はいいんだけどね。」

つまりね、阿良々木くん。私が言いたいの」

一度、言葉を切って。

「そういうスキンシップは、まず恋人。彼女である私にするべきではないでしょうか」

羽川さまはのたまうた。

「は？」

「私は、阿良々木くんの彼女なんだよ」

「そ、そうか」

情けないことに、僕はそれだけしか言えなかった。その、衝撃に嫉妬、なのか？あの羽川が、嫉妬？いや、そうじゃない。

羽川だって女の子だ。どんなに優秀で、冷静さを失わないからって、超人じゃない。聖人君子なんて、そんなものであるはずがない。羽川はただのどこにでもいる女の子で、たまたま優秀で、聖人君子のような、という修飾が似合うだけの女子、というだけ。

…っ！か、ここまでお膳立てされて何もできない男はクズだ。いや、それ以下。

「羽川」

「うん」

「あー…うん。その…」

「うん」

「そう、その…えっと」

「うん」

「お、お嬢さん！」

「……」

「お、お、お、お、お手を、は、拝借してよよろしいでしょうか？」

テンパリまくりの噛みまくり。しかも怪しい口調に時代がかった言い回し。いったい、どこの何者だよ、お前は。全く、穴があったら入りたい。なかったら掘ってでも！

「よしなに」

たおやかな微笑とともに、差し出される手。その手を僕は跪き押し戴く。

「つたく、僕は一体なにをやっているんだろう。」

「ここは舞台の上でもなければ、中世でもない。」

「現代の、それも天下の往来で。」

恋人の前で、騎士さまよろしく手をとっている。ここで手の甲にでも口付けをできればあるいは完璧だろうか？生憎とそんな度胸は持ち合わせていないが。

「ああ、もう。くそっ。」

これで僕も火憐ちゃんを笑えないし、説教もできなくなっちゃまった。

妙にブルーなき分にひたりつつも、羽川の手をしっかりと握る。柔らかく、温かい手。どうしようもなく駄目だった僕を立ち直らせてくれた女の子。そう思うと、この手を握っているという現実は感動ものである。

「阿良々木くん。そんなに物珍しげにされると、恥ずかしいんだけど」

「いや、なんていうか。感動してる」

「手を繋ぐ前に、パンツ見たり胸を触ろうとしたり。いろいろと順番すっ飛ばしてるけどね。」

「まあ、事故と緊急避難、ということで見逃してあげましょう」

「ただし。私は気まぐれな猫だから、それだけは肝に銘じて置くよ」

「ああ」

「帰る？」

「……どこかに寄っていくか？」

「んん？ どこかって？」

「特別どこか行きたいわけじゃないけどさ、ホラ、その、なんていうか」

「知っているからこそ。羽川を一人で散歩させるのは、なんだか嫌だった。」

「ありがと、阿良々木くん。」

「じゃあ、リクエスト。阿良々木くんの家に行きたいな」

「ウチに？」

「うん。ほら、火憐ちゃんと月火ちゃんにもご挨拶しないと」

「まじで？」

「だって、必要なことでしょ？」

「あいつらに……？」

「なに言ってるの、阿良々木くん。大切な家族じゃない」

柔らかな笑顔の羽川。っていうか、羽川と妹たちは普通に知り合
いだし、交友がある。

うつつ。確かにいつまでも黙っているというのも変だし、羽川の
言うことには一理どころか百理はある。いや、真理というべきか。

確か、羽川から告白されたのが五月の頭だったか。そして今は夏
真っ盛りといった感じの七月。期末テストが目前だ。

付き合い始めてから約二ヶ月、そろそろ何か進展のあっても良い
頃かな、とは思う。というか、言われるまで気付きもしなかった僕
はもしかなくても相当に鈍いのだろうか？

「んん。絶滅天然記念物くらい、かな？」

「まじで……？」

「まじで。意外も意外。阿良々木くんは結構に人気があるんだよ？」

「初耳だ…」

僕はもしかして、いろんなところで損をしていたりするのだろうか？

「代わりに男子からは恨まれてるみたい」

朗らかに笑う羽川。笑顔は眩しいが発言が物騒だ。

「できればそれは聞きたくなかった！」

時々、妙に怨念染みた視線を感じるのはそれが原因か！

「ちなみに。あることないこと、噂に流したのは私です」

「仕込みからしてお前かよっ！？」

なんで！？どうして！？僕、なんかやらかしましたか！？

「別に。強いて言うなら、お返しかな」

……そういえば、羽川の噂を流したこともあったっけ。羽川 直江津高校全員、みたいな内容のを。いや、今でもその内容については間違っていないと思っっているけど 見方は変わったかもしれない。

羽川と出会って。

怪異に出会って。

友達になって。

付き合うように、なって。

「そうか、お返しなら仕方ないな」

僕は、また笑えるようになった。

それこそ、三ヶ月前には全てが灰色でしかなかったのに。今はこんなに色鮮やかだ。

今や全くの別人になったとすら言えるだろう。

羽川は「阿良々木くんの更生は私の人生目標になるかも」なんて笑って言うけれど。僕はもう、とっくの昔に、お前が内側に踏み込んできてくれたときに更生しているんだぜ。

多分、羽川はそれも全部知っているのだろうけれど。なんて、そんなことを考えたら笑えてきた。

「阿良々木くん、どうかした？ 急に笑い出して」

「いやいや、毎日が楽しいな、と思って。つい」

これは心から。

「羽川、お前は楽しいか？」

「んん。毎日が大変だけど。楽しいよ」

その大変、という部分は主に僕か。

羽川先生におかれましては、いつもご迷惑をおかけしております。

「いえいえ」

もうね。なんていうか。

羽川にはもう一生頭が上がらないと思うんだ。
いろんな意味で。

「さて。それでは、我が家へご招待させていただいてもよろしいでしょうか？」

僕は羽川の正面に跪いたまま、忠誠の騎士よろしく羽川を見上げる。

「というか、ここまでの会話の間僕はずっとこの姿勢だったんだよな。」

「…なにやってるんだか。」

「うん、よろしく。」

「では」

僕はようやく立ち上がる。

羽川の手は離さないまま、信号が青になるのを待つ。

「前にも、こういう場面、あったよね。」

「始めて会ったときのことか。」

「うん。」

握る手に、俄かに力が籠る。

「まだ、半年も経ってないんだよね。」

「そうだな。色々ありすぎたくらいだ。」

実は密かに心配しているんだが、イベントがネタ切れしたりしないか？」

「あつはー。大丈夫だよ。これくらいで尽きたりなんかしないよ。私も、阿良々木くんも」

「だって、どうしようもなく自分勝手な二人組だよ？ 何も起こらないなんてありえない」

挑戦的、というには穏やかな悪戯っぽい笑みで。

「ね？」

なんて。

全く、この人は。

「ははっ、違くない」

羽川と二人、笑う。そんな将来ならどんとこいだ。全くもって望むところ。

さしあたっては、輝かしい将来のために我が妹たちの洗礼を受けなければならぬが、それもまた楽しいだろう。

常の僕にはないポジティブ思考。

僕をそうさせるのは確かな温もりを伝えてくるこの手。

ただの手なのに。こんなにも頼もしい。

「植物じゃなくて良かったって、心から思うよ」

「どづいっ心境の変化？」

「彼女がいるって幸せだな、ってことだ」

「似合わないね」。そういうの

「放っておいてくれ」

二人。横断歩道を歩く。

いつかのように分かれることはない、同じ道。

羽川と共に歩く道だ。

明かりもない道を（後書き）

今回は前作で恋人同士になった阿良々木くんと羽川さんのお話の続きです。なんかもう、個人的な妄想大爆発ですがこの妄想が続く限りは続編を出していきたいと思います。

短編小説で投稿していた『君の知らない物語』シリーズを一話完結方式の連載に一本化しました。以降はこちらで掲載します。

強がる私は臆病で（前書き）

ちよつと長くなつたので前後編になります。

強がる私は臆病で

「どうしよう、阿良々木くん」

羽川は常にないような泡手振りでもくし立てるように言った。

「子供ができちゃった」

大至急。

そんな感じのメールを受け取ったのが午前八時三十分。

妙な既視感を覚えながらも、指定された公園についたのが二分钟前。そして衝撃の発言を聞いたのがたった今。

午前八時四十八分のことだった。

正直な話。

電車に轢かれたような衝撃で、いくら打たれ強い僕とはいえ。突発ネタには弱い。八九寺流に言うならアドリブに弱い、ということになるか。

ともかく。

百戦錬磨の僕とはいえ即座に反応できないでいる。

そんなことよりも、羽川の表情に魅入っていた。羽川が本気で困惑している顔など滅多に見れるものではない。いつも、きびきびシャキシヤキしている羽川。それとは対照的におろおろと所在なげにそわそわしている姿など今世紀はもう見納めだろう。僕がその奇跡の唯一の目撃者だ。言うまでもないけど、そんな羽川も超可愛い。

「あの、阿良々木くん？」

「ああ、すまない、羽川。それで、僕たちの子供のことだっけ？」

「え？ あ、うん。ちょっと違う、かな？」

いや、羽川。そこは否定しておけよ。

僕たちはまだ健全なお付き合いのはずだ。

いろいろと誤解できそうなシーンはあったけど、ほんと、何もない。実はデートだってまだだ。お勉強会をデートと読み替えるなら、その回数はかなりのものになるけれど。というか、毎日？

でもそれは違うだろう。いや、違うと思いたい。別にメルヘンチックな理想があるわけでも、女性との交際に幻想を抱いてるわけでもないけど。

話を戻そう。

とにかく、子供が出来たらしい。誰のか？ 僕と羽川はそういうお付き合いをまだしていないから、僕たちではない。戦場ヶ原には何度も襲われたが、逃げ切った。神原は問答無用ではたき倒した。

アイツはヤバイ。リアルにヤバイ。実に犯罪的だ。出会い頭に押し倒されることがそう何度もあっていいはずがない。その昔、若かりし僕が八九寺に行っていたセクハラは巡り巡って僕に返ってきている。あの恐怖は本物だ。

ギラついた瞳。

荒い吐息。

支離滅裂な言動。

不意を突いての奇襲。

本気で泣きを入れて八九寺に土下座したのはついこの前だったか。

またまた話を戻そう。

つまりは、羽川の両親のことなのだろう。

「うん、お父さんとお母さんから。今朝、聞いたの。

今までのすまなかった、って。

今からでもやり直せないか、って」

簡単な話。

羽川家で再婚同士の両親の間に子供が出来て、それを機に気まずい関係を改善しようとしたのだろう。羽川は決して多くを語ることはないけれど。

「随分、都合のいい話だな」

「だよな。十年近く放っておいて、今更……」

そう言う羽川の表情は晴れない。

「本当に 今更」

苦りきった独白。

それは後悔か、郷愁か。

「どつするつもりなんだ、これから」

「どつもしないよ。私はなににも変わらない。今まで通りだよ」

「いいのか、それで」

「いいも悪いも、他にどつしよつもないじゃない」

どつしよつもない。

どつしよつもない、か。

春休みにも、同じようなことがあったっけ。

袋小路。

思考の迷宮。

堂々巡り。

「本当にどうしようもないのか？」

今のお前は春休みの僕と一緒にじゃないのか。死ぬしかない。太陽に身を投げるしかない。そう思い込んでいた僕とまるきり同じ。

できるわけがない。他に手段なんてない。そう思い込んでいるだけ。

「私が今までなにもしてこなかったと思ってる？」

「お前のことだ。考えうる限りのことを手段は取り尽したんだろう」

それこそ、考えうる限りを。

その結果として、羽川は傷を負いさえしたのだから。

「でも、今回は違うだろう。気持ちのベクトルが」

メンタルの違い。和解の意思があるかないか。それは大きな違いだ。

「まあ、お前が嫌だと言うならそれで構わないけどな。

そんなことは僕が羽川を嫌う理由にはしない」

「阿良々木くん、それは脅迫？」

「かもな」

否定はしない。

むしろ肯定。

でもな、羽川。僕はお前の恋人として、友達としてなんとかしてやりたいんだよ。それがたとえお節介だとしてもだ。

「でも、家族って悪くないモンだぞ」

お前が、一番良く分かっていることかもしれないけど。

ウチに居るときの羽川は、火憐ちゃんと月火ちゃんと居る羽川は、本当に楽しそうだから。ウチに来るようになってからというもの、本当に仲が良い。それこそ姉妹のように。そんな感じで僕がハブラれることも多くなってきた、それはそれは寂しい思いをしたものだが。

それを知っていてこんな話をしているんだ。知っていて、羽川を追い詰めている。その自覚はある。酷い悪役っぷりだ。

”家族”は羽川が唯一忌避し、目を背けてきたものだ。僕もそのことをよく知っていたからこそこの話題を避けてきた。問題を問題と理解しながら、放っておいたのだ。他人が口を出していい話ではないとか、羽川がそれを望んでいないから、とか。言い訳をして放置していた。

心地良い関係だけに甘え、浸ってきたのだ。お互いに。

「このままでいいなんて、思っていないけど……私だってそんなこと分かってるけど……」

それが分からない羽川ではない。

聡い彼女が、分からないわけがない。

問題なのは、春休みの僕と同じ メンタル。

「今更、どうしたらいいの」

十年。

十年だ。

その人生の半分以上を偽り、騙して生きてきた十年。

諦めが絶望に。絶望が憎悪に。そして諦観へ。

気持ちが変わってしまふのには十分すぎる時間。

生き方を変えてしまふには十分すぎる仕打ち。

一人で悶え苦しみ、押し殺して押し潰してのたうちまわって辿り着いた安定。それを根底から突き崩されようとしている。

僕や戦場ヶ原、神原が怪異に出会って変わった。だけど、羽川のそれは、変化なんてものじゃない。そんな生易しいものじゃない。いい。

革命。

全てを否定して、ひっくり返すことなどできようはずもない。自殺にも等しい自己否定だ。

「一体、どうしたら……」

でも。

羽川は強い。

天才とか、そういう意味じゃなくて。心が。芯が強いと思うからだから。

恐れ多いことだけど。

僕は叱咤する。

春休みに、あの薄暗い体育倉庫で羽川がそうしたように。

「逃げるなよ羽川。身も心も。多分、これが最後のチャンスだ。時間の間隙は埋めていける。それに」

「それに？」

「弟か妹の未来がかかっている。お前だけの問題じゃない」

「……そんなこと」

「なくないだろ」

反論封殺。兄妹のいないお前には分かってない。

「仮にご両親が子供に苦手意識を持ってしまったら、その子はどうなるんだらうな」

これはかなりセコイ手だと思う。

羽川の弱みに付け込んだ、卑怯な手だ。

困っている人を放っておける奴じゃない。無責任なことのできる奴じゃない。

そんな振りをしているわけでも、繕っているわけでもない。それが羽川の本質だから。

厳しくも優しい、本当にいい奴だということを知っているから。

その恋人は人の将来を人質に取るような悪役だけだな。でも、だからこそ、こんな手も使う。

本気で”家族”と向き合って欲しいから。

「僕は歪むと思う」

「歪むって……」

「お前は真っ直ぐだ。お前がどう思っているても真っ直ぐで正しい。でも、歪んでる。」

歪み歪んで曲がり曲がって真っ直ぐに立ち返っただけだ」

今、このときばかりは人間強度が欲しいと思う。人に嫌な思いをさせるのが分かっているのに、言わなければならぬ。

その点、忍野は容赦なかったなあ。スマートではないけど、ストリートな人だった。この話だって、忍野に言わせれば「全く。酷い歪みっぷりだよ、委員長ちゃんは」といったところか。「それに、阿良々木くんも甘いねえ。甘すぎてむし歯になっちゃうよ。一体、どこまでお人好しなんだか」とも。

僕は忍野のようにはなれない。どこまでも、甘い。でもな、僕はそれでいいと思ってるよ。

「お前は強いから、全てを認めて、受け入れて生きてこれたけどな。生まれてくる子供にまでその強さを求めることはできないだろう」

「私は、強くなんて……」

「お前は強いよ。お前の強さのお陰で、僕はまだ生きてるんだから」

「でも、私は……」

そつだ。こつという奴だから。

柔軟な癖に、妙に頑固で。融通が利かない。

「それなら、それでいいや」

完璧な人間なんて居やしないんだ。

「ただ、お前に励まされてる奴や支えられている奴らが居るってことよ」

例えば、僕とかな。その在り方に、どれほど影響を受けたか分か

らない。

火憐も月火だって。気付かないうちにお前に影響されて変わってきたように思う。

「……」

「その子にも、その強さを分けてやってくれ」

これは心からの願い。でも都合のいい、他人からの要望。そんなものが認められるはずもない。

これは牽制だ。

僕が欲しい言葉を引きずりだすための呼び水。

安っぽい、挑発。

普段なら、引つかかるような羽川でもないが今は普通じゃない。

不安定な羽川なら、騙せる。

家族のことを想っているなら…乗ってくれる。

ははっ、乗ってくれるだって。どこまで羽川頼りなんだか。

「そうだね…。そう、したいね」

俯いて、喉からなんとか絞り出した声は震えている。

「でも…それじゃ、私の気持ちはどうなるの」

びっ。

羽川の頭に三角が二つ。

耳だ。猫の耳。

「それが理想なのは、分かっているよ？ でも、そんなの私にとってはなんの意味もない。私は…気持ちの整理をつけたいだけ。この息苦しさを、胸のざわめきを、やりきれなさを清算したいだけっ」

十年の苦しみ。

ストレスを発散させなければ。

GWの一件程度でどうにかなるものではなかった想い達。

それを吐き出したいんだ、羽川は。

やっと聞けた本音。

「そうしないと、私は前に進めない」

羽川の艶やかな黒髪が色を失い、白く染まる。編み込んだ髪が解ける。日中にありながら月光のように白い。

”障り猫” 羽川の本音を代弁する、黒い白猫。満たされない想いを消化する猫。

同じ羽川で表と裏。

黒い白と白い黒。

忍野は言った。言うなればそれは二重人格なのだと。

白と黒、隣り合わせに存在しながら決して交じり合わない。

でも、今の羽川はその境目が極めて曖昧。聡い彼女は”もう一人の自分”にもどこかで気付いていたはずだ。ただ、認められなかっただけ。

両方の羽川を知っている僕には灰色にしか見えない。

二人の羽川は一人になろうとしている。背反していた二人は同じ方向を見ている。

姿形は白猫なのに、その瞳は優しい羽川の眼。歪で真っ直ぐな羽川翼。

「本当は、仲良くしたいよっ！ でも、でも！！ 納得がいかない
！！」

頭では分かっているけど、心が拒絶する。よくある話だよな。でもそれはただの八つ当たりで、別のことで溜めたストレスを発散できずにイラついているだけ。行き場のないエネルギーをもてあましているだけ。それを受け止めなければならない。捻れ曲がった想いを。

「よし。じゃあ、僕を殴れ」

なるだけ、なんでもないことのように。

「お前が満足するまで、心ゆくまでやれ。全部吐き出してしまえ」

「そんなこと」

「僕がそうしたいんだ。それになにもタダでは言っていない」

にやり。と不敵にふてぶてしく笑って見せる。

「代わりに、今度一晩抱き枕な。エロスありで」

涙さえ浮かべた羽川は微笑んで頷く。

「なんでも言うこと聞いてあげる。一生でもいいよ」

「その提案は刺激的だな。楽しみだ」

「信じてるから……」

……死なないことを。

「ああ、任せろ」

羽川が眼鏡を外す。

一瞬、微笑が交錯して顎が砕けた。

軽く意識が飛んで、倒れ込もうとする僕を拾い上げるスマッシュ（ボクシング用語）で目が覚めた。オープニングヒットにしてはあまりにも重い。というか、まだ首が繋がっているのが不思議ではない。そういえば、『はじめの一步』がマイブーム、なんて言ってたか。火憐ちゃん繋がりで。

スローになった世界。いい具合にシェイクされた頭でそんなことを考える。が、追撃の拳が鼻っ面に突き刺さり再び思考中断。たったの三撃だというのに深刻なダメージを負っている確信がある。再生とか関係ない、脳を揺らされた。運動機能喪失。

影縫さんほど鋭さがあるわけではない。神原ほどハイパワーではない。羽川の”猫”はそういう類の怪異ではない。

だが、しかし。

羽川なのだ。本物の天才が、拳を振るっているのだ。人体の構造を知り尽くした一撃は確実に急所に突き刺さり、確実な苦しみを約束する。

苦しみ。苦痛か。

数度の意識中断の狭間で妙な安心を覚えた。

別に殴られすぎて頭が変になったわけじゃない。直感、あるいは閃きだ。どちらも同じかもしれないけど。

羽川が僕を殺すことはない。そんな確信。

羽川は両親を憎んでいる。でも、その憎しみは必ずしも殺意には結びつかない。GWに羽川は両親を殺しはしなかった。代弁者たる猫は殺さなかった。重傷を負わせこそしたものの、殺しはしなかったのだ。

擦れ捻れた歪んだその情は。

親愛ではないのか？

そのやり場のなかった想い　愛情の重さが、この苦しみか。全身に感じている痛みは、羽川の想いの転化なのか。そう思えば、この痛みも愛しく思える。この身に羽川の十年分の愛を受けていると思えばもはや赤面モノだ。ただし、万民向けとは言い難い。死んだ方がマシというくらい痛い。

内臓に的確にダメージを与えるべく打ち込まれる拳に苦痛の大絶叫を四重奏。骨格は軋みを上げて、砕ける音を響かせる。悶絶と悲鳴のオーケストラ。羽川指揮、奏者阿良々木暦でお送りしております。

「って、冗談にらんわ！！」

そう叫んだつもりだったが、声になることはなく唇の隙間から僅かに息が漏れただけ。

身体を突き抜ける衝撃。例えるのなら地震。震源地は僕。

いや、もうなんていうか。痛みどころか全身の感覚がない。痺れているような感じだろうか。もはやどこを殴られているのか、どう殴られているかも分からない。

これも羽川の優しさか？　なんて考えてしまう僕は相当にイカれているのだろう。人が良いにも程がある。ああ、もう、くそ。今更ながら羽川に惚れ直し。しかも、こんなタイミングで？

愉快だ。実に愉快だ。笑える。もう最高に笑える。

感覚は断絶したまま。身体は必死の再生を続けているのかもしれなかつたが感覚の戻る予兆はない。自分の足で立っているのか、それとも羽川の拳に立たされているのか、という判断もつかない。

ただ、今も思考が中断していないという事実。それだけが生存の証明だ。

羽川に教えてもらった、西洋思想。デカルトだっけ。” 我思う、

故に我あり”の人だ。少しでも疑いの余地があるものを全て偽と定義し、数式や自己の身体が存在すらも否定しうると考えたデカルトが唯一疑いの余地のないものとして、確実に在るものとして自己の存在を定義した言葉だ。まさにそんな状態。

そんな僕が断片的に得られる、もしかしたら錯覚かもしれない情報に依れば、只今空中コンボの真っ最中であるのだろう、ということくらい。どうやら、比較的現実世界の物語から格ゲーの世界へとシフトしたらしい。

しかし、羽川。お前、ゲームなんてやるんだな。十中八九、我が妹たちに付き合っただろうが。しかも、随分えげつない。空中八メコンボですか。今度、是非とも僕とお手合わせ願いたいものだ。もちろん、ゲームで。

なんかもう全てが他人事に思えてきた。全身が殴打、乱打を浴びているのは分かるのだけど、現実感が希薄だ。実際にどれくらいのダメージを受けているのかも全く分からなくなってしまっている。にもかかわらず心は静かだ。水鏡のように平らで、いささかの乱れもない。このまま寝入ってしまうかという誘惑に駆られるほどに。

それもいいかな、と思う。しかし、寝入ってしまうと雪山で遭難したときのようなことになってしまつか？などと取り留めのない思考を弄んでいた時。

鮮烈な赤のイメージが疾駆った。

僕は半ば本能的にそれに手を伸ばし、美しき黄金を掴み取る。

鉄血にして熱血の吸血鬼。その成れの果て。僕がこの世に縛り付けた存在。

忍。

突然の出来事にコンボは中断。僕は忍の首根っこを掴んだまま自由落下。硬い舗装された地面に叩きつけられる。落ちるまでにかなしの浮遊時間があったがそれについては考えないことにする。恐ろしすぎる。一体、何メートル打ち上げられていたのか、僕は絶対に

知りたくない。むしろ、そんな最中であって忍を掴んだ手を離さず、かつ抱きかかえることで落下の衝撃から守ったことを褒めてもらいたい。動かないと思っていた身体も、必要に駆られれば意外と動いたりするものらしい。人体の不思議。この場合は驚異か？

「げふっ」

落下の衝撃と相まって盛大に血を吐いた。美しい金色を血で汚してしまった。

こりゃ、どやされるかな。と思ったが、今は忍を押さえ込むことを優先した。きつと、怒気を小さな身体にみなぎらせて暴れださんばかりだろうから。

幸いというべきか。血を与える前だったから忍に吸血鬼としての力はない。見た目通りのただの幼女だ。代わりに僕もちよつと死ににくい程度の存在でしかない。

瀕死。息絶え絶え。辛うじて死んでいない。ボロ雑巾。

今の僕の状態を表現する言葉は一ダース集めるのに事欠かない。

掠り傷程度ならともかく、全身複雑骨折、内臓損傷多数というのは無理だろう。あくまでも想像だけ。

それでも。

僕は死んではない。

みちみちと身体が再生する音が聞こえる気がして吐き気がする。

「忍。悪いな、相談くらいはするべきだった」

「生きておるのか、お前様よ！」

常がない切羽詰った忍の様子に笑いを隠しえない。今日は人の意外な面を見ることが多い日だな。

「死んではいないらしい」

髪を撫でる。

僕の血で赤く汚れた金髪がやけに美しく見える。壮絶な美しさというやつだ。

怒り心頭。小さな身体を震わせる忍が僕の首筋に牙を立てようとするのをやんわりと止める。

「止めるな。止めてくれるなお前様よ。僕は怒っておる」

「後でミスドで食い放題でどうだ？」

「このっ、戯けがっ！ そのような話をしておるのではない！」

至近距離で僕に食って掛かる忍。瞳の中で燦る炎は間違いなく本物。もしかしたら、このまま髪の毛が逆立って戦闘力が数百倍とかになったりするのだろうか。

だが。

「そっという話なんだよ、これは」

なだめすかすように髪を撫でる。服従の証として。嘆願として。

「羽川は癩癩を起こしてるだけだ。僕は恋人としてそれをなだめているだけさ」

「しかし」

「頼むよ、我が主さま。これはただの痴話喧嘩みたいなもんだ。恋人同士の睦み合いなんだよ」

これは壮大で凄惨な惚気話なのだ。

「……フン。そんなものに手を出した日にはヘッドレスホースに蹴られてしまっわ」

帰りにはミスドじゃ。それで手打ち。そう言ってふてくされながら忍は影に戻っていく。

「ありがとよ」

僕のサイフが許す限り、食わせてやろうと思う。

なんて話をしている間に少しは動けるようになった。不協和音の大合唱は鳴り止まないが、無視できる範囲。

「すまない、羽川。とんだ邪魔が入っちまった」

のそり。

緩慢な動きで立ち上がり羽川と対峙する。

「阿良々木くん……。もう、やめよ？ 私、耐えられないよ。我慢するから、もっと頑張るから！ ……もう、やめよ？」

「逃げるなよ、羽川翼！」

僕は精一杯の気力を総動員して叱咤する。羽川は何も悪くない。

それどころか、僕を心配してくれているというのにそれを怒鳴りつけなければならぬ。この精神的な負担は辛い。苦行を強制し、なおかつ痛みを許容しなければならぬ。どんだけマゾいんだ。

それでも。

「ここで全てを清算しろ。二度目はない」

今この時を逃してしまつたら、もう二度と本当の羽川には会えない。そして、遠からず破局が訪れるだろう。そんな予感。そんな未来は願ひ下げだ。僕はもう羽川にベタ惚れで、彼女の居ない未来は想像できない。いや、したくないのか。

羽川の拳を握る手が震えている。

僕の痛みとは別種の痛み。火憐ちゃんが言っていたのと同じ痛み。心の痛み。

「弱気になつちゃ、いけないんだよね。逃げちゃ、いけないんだよね」

「そうだ。全部受け止めてやるから、任せろ」

「ごめんね」

泣き笑いの羽川が再び動き出す。

一直線に。僕に向かって。

両の手が僕の顔に添えられ　　柔らかい唇が僕の頬に触れた。

「え？」

ごきり。

疑問を感じた瞬間には羽川の拳が僕のこめかみを正確に捉える。角度、速度、僕の姿勢。ありとあらゆる要件が一致し、最大効率の破壊力を提供する。

首のあたりで嫌な音がした。

頸骨がイッた。そんな不吉な確信をもって僕は意識を喪失した。

強がる私は臆病で（後書き）

短編小説で投稿していた『君の知らない物語』シリーズを一話完結方式の連載に一本化しました。以降はこちらで掲載します。

興味がないようなふりをしてた(前書き)

後編です。

興味がないようなふりをしてた

鋭い痛みで目が覚める。

次いで頭痛と吐き気と倦怠感。爽快な目覚めとは程遠い気分。とりあえずは、生きてはいるらしい。しかし、視界は真っ暗。身体中違和感だらけ。全身これブリキのおもちゃ。

でも、まあ。
ともかく。

生きているようなので良しとしようか。気分は最悪なのに、それがどうでもよくなるような心地よさを感じているのがその理由。ふわりと香るよい匂い。

確かに感じる柔らかな温もり。
全てが僕を柔らかく眠りに誘う。

「もう少し、寝てていいよ。ちゃんと起こしてあげるから、ね」

福音。

慈しみに満ちた羽川の声。

全てを許容し、包み込むような確かな温もり。

何かが明確に変わった、そんな感じ。

”何が”とは言えない。僕には当然。羽川にだってきつと分かっている。

なにもかもが想像でしかないけど。僕のフィーリングでしかないけど。僕が思うに、羽川はきつと克服したのだろう。

自分の過去を、とりあえずは清算できたのだろう。

よかったな、羽川。

でも、悪い。お言葉に甘えてもう少し眠らせてもらおう。もう少し、この心地よさに浸っていたいんだ。

* * *

目が覚めたのは夕方ごろだと思う。なんでそんなに曖昧なのかと
いうと、瞼の裏に感じる日差しの強さとか、空気の感触から判断す
るしかないから。なんたって、目が開かない。口も動かない。当然
のように身体も動かない。どうなってるんだ？

「阿良々木くん、動いちゃだめ」

羽川の声が上から降ってくる。

動くな、と言われても動けないんだが。なんか弾力的で温かいも
のが頭の下にあるような？

僕はいったいどんな状態なんだ？

「教えてやろうか、お前様よ」

あれ？ 忍？

「ちょ、ちょっと忍ちゃん…」

焦り気味の羽川。

それだけで聞きたくなくなってきた。

「今のお前様は不死力がほとんど尽きておる。正確には重傷を回復
して尽きた、というべきかのう。儂とて、死を覚悟したぞ」

儂とお前様は繋がっておるのを忘れておったじゃろう。かかか、
と笑う忍。

伝説の吸血鬼をして、肝が冷えたと言わしめ、大幅に力を減じた
とはいえ殺しかけたのだという。どうやら、本当にギリギリで助か
ったらしい。あるいは助けられた。

「それでお前様は全身打撲で眼鏡の女子に膝枕されておるといわ
けじゃ。なかなか良い感触じゃろう、お前様よ」

膝枕か。

なるほど、この至高の感触はあの肉付きの良い太腿か！ついつい
パンツにばかり目がいつてしまっていたが、記憶に妬きついた映像
を反芻してみればあの健康的な太腿も芸術的な美しさがあつてそそ
られるものがある。その太腿が、僕の頭の下に、布一枚隔てたこ
ろにあるというのか！

「阿良々木くん」

氷点下。

絶対零度。

バナナで釘を打つどころか、お互いに砕け散りそうな冷たい声。

一瞬、神の存在を確かに感じさせた福音の如き柔らかな声はどこ
へ!?!?

「あ・ら・ら・ぎ・く・ん」

はい。

ごめんなさい。

反省シマス。

というか、羽川。なんでお前には僕の考えていることが筒抜けな
んだ？素朴な疑問。

「かかかかか」

愉快そうに大笑いする忍。

てめえ、後で覚えてろ。

「そう言ってくれるな、お前様よ。儂とて動けんのじゃから」

ま、直接殴られたお前様ほど酷くはないがの、なんて。

あー、うん。なんていうか。本当にごめんなさい。

「つか、なんだ。僕が影縫さんにボコボコにされたときですら平然としていた忍が、ノックアウトするって、マジでなにがあったんだ。」

「ああ、それにしても良いのう。たまらんのう。この膝枕というやつは！」

膝枕ツイスト状態かよ。

でも、まあ、いいか。気持ちいいし。

殴られた甲斐もあったというものだ。

しかし、惜しむらくは羽川の姿をこの目で見られないことだ。膝枕というシチュエーションは、かなりきわどいアングルから見上げることになる。羽川の豊満ボディならばさぞ圧巻であろう。

「俗物めが」

あはは。男の浪漫というやつだ。晒いたければ晒えばいい。止めようと思っ止められるものでもない。

「ま、それもしばらくは叶わぬであろう。お前様の顔は水死体もかくや、という有様じゃからのう。ますます男前が上がるというもの

「じゃ」

くくくく、とわざわざ笑いを我慢されているのも気に入らないが、ともかく状況はつかめた。つまりは、眼も開かないほどにまぶたやらなんやらが腫れ上がっているということらしい。いつもなら、その程度すぐに治癒してしまうのに、不死力のほとんど尽きた今ではそれも叶わない。

でも、それが普通なんだ。傷は簡単には治らない。…それでも、常人の倍以上のスピードで回復しているのだからうけど。

「お前様を心配するわけではないが、今しばらく眠っておるがよい。日が沈めば、治りも早まるう。僕も眠る」

極上の枕もあることじゃしう。それっきり、忍は沈黙した。

僕も、身体も口も動かない以上、何も出来ない。眠ることにしよう。小粋なジョークも口に出来なければ僕がおきいても仕方が無い。忍じゃないけど、最高の膝枕に身を任せて眠るのは良い提案に思えた。

悪いな、羽川。さつき起きたばかりなのに、もう一度眠るよ。

「おやすみ、阿良々木くん。忍ちゃん」

* * *

ようやく、人並みの目覚めを迎えたのはすっかり暗くなってからだった。でも、相変わらず頭の下には確かな温もりがあって幸せな気分になる。

はじめに視界に入ったのは羽川の晴れ晴れとした表情　　がよ
かったのだが、そうはいかなかった。涙の後の残る頬と、泣き腫ら
した赤い目をした羽川だった。

「ごめんね、阿良々木くん。私のせいでこんな目に合わせちゃって」

「え？」

「本当に、ごめんなさい…。」

ぼたぼたと涙が顔に落ちてくる。

「私が弱いから、こんなことに」

今頃になって、後悔をしているのか？安っぽい挑発に乗って激発
して、感情の赴くままに力を振るったことを？それを自分の弱さの
せいにして、自分を責めているのか？

それはお前の美点だが、弱点でもあるな。

「羽川、勘違いするなよ。これは僕のエゴなんだから」

全くもって、お前が責任を感じる必要なんてないんだ。ただ、僕
が家族は仲良くあるべきだ、なんて安っぽい理想を振りかざしてお
前に和解しろ、と迫っただけの話。その和解の交換条件として僕が
羽川の感情の捌け口になっただけのこと。GIVE & amp; TAKE
KEの関係だったはずだ。

ああ、でもこれは僕から見た話か。羽川はきつと違った風に見え
ているのだろう。そう、いつか僕が羽川に言った”自己犠牲”。

これは春休みの逆回しなんだ。僕にとって当然の行動も、羽川に
はとんでもない犠牲を支払った献身に見えただけの話。僕にとって

は当然の行動だったのに。
だったら、僕が言うべきセリフはは決まっている。

「僕はな、羽川。相手のために死ねないのなら、僕はその人のことを友達とは、ましてや恋人とは呼ばない」

初めて聞いたときはなんて乱暴な定義だと思った。でも、今はそれが当然。当たり前になっっている。自慢にもならないけれど、僕は火憐ちゃんや月火ちゃんと違って友達は多くない。そんな友達を助けるためになら命を賭けるのは当然。そんな気持ちの変化が妙に嬉しい。

「それは、自己満足ってこと？」

「ああ、自己満足だ」

「それじゃあ、仕方ない…ね」

震える声で、僕たちは確認する。

新たな涙が頬に落ちてくる。なんとなく、僕はそれをなめとった。
ん。しょっぱい。

「ごめんは、もう言わない。ありがとう、阿良々木くん。でもね、
なにかお礼をさせてほしいな」

涙をぬぐいながら微笑みかける羽川の表情に憂いは全くない。涙の
後も、赤い目もそのままだけ。

「自己満足？」

「うん、自己満足。私が、そうしたいの」

「じゃあ、キスで」

「冗談半分。」

でももう半分は本気。

意識をなくす前に一瞬触れたあの感触をもう一回、なんてそんな悪戯心。

でも、そんなことを考えている間に僕の唇は塞がれていた。

返事の代わりに。

緊張なんてする暇もなく。

羽川の唇の柔らかさをたっぷり感じることも数秒。羽川の唇が離れて、熱っぽい息が漏れた。二人の吐息が混じる距離。

「もう一回?」

「もう一回」

今度は不意打ちでもなく、変な緊張もせず、ゆつくりと唇が重なった。長いようで短い数秒を共有して、再び離れた。

二人、赤い顔で笑みを交わす。

「阿良々木くん。本当に、ありがとうね」

なんか、いろいろすつきりした。そんな顔。

いい表情だった。

「私、お父さんとお母さんと話してみる。今なら、できる気がするから」

「そっか」

「うん。そこで、お願いがあるんだけど。いいかな？」

「ああ。なんでも言ってくれ」

「ありがとう。あのね、電話を繋いでおいて欲しいの」

一人だと、ちょっと怖いから。

「電池が続く限りはな」

「ありがとう」

その程度のことですら安心できるのならお安い御用だ。

「よっしー！」

羽川は小さくガッツポーズを取って気合を入れる。

「それじゃ、早速行ってくるね。何も言わずに飛び出してきちゃったから心配しているかもしれないし」

「ああ」

そうとなれば、身を起こさなければなるまい。羽川の膝枕は大変に心地よくて、名残惜しいのだが。…お前の決意を鈍らせるにはあまりにも下らない理由だな。

「あだだだだだっ」

身を起こしはしたものの、全身が引き攣る。

久しく忘れていた感覚。日頃から運動を心がけるような殊勝な人間でもなく、鍛えもしていない僕。そう、全身筋肉痛。吸血鬼の身体になつてからは全くご無沙汰だった。

「ごめんね、阿良々木くん。後で電話するから」

そんな僕を知つてか知らずか。

あ、謝っちゃいけないんだっけ。それでもやっぱり小さくごめんね、なんて言つて。軽く頬にキスをして羽川は駆け足で公園を飛び出して行つた。それこそ、名残りを惜しむなんて一切なく。残像を残さんばかりの高速移動。もしかしたら神原とも張り合えるんじゃないのか？

きっと、決意が鈍らないうちに、ということなのだろう。物怖じなんてキャラじゃないけど、家族だけは別だ。羽川にとってはずっと鬼門”だった”。

そう、過去形。

きつと明日にはなんとかなつている。なんとかしてしまつてい

「お前様よ。少し話がある」

背中に軽い荷重がかかる。多分、忍が乗つかっているのだろう。

「我が主様。もう少し段階を踏んでからご登場いただけるとありがたいんだが」

誰も居なくなつた、と思つたところにいきなり声をかけられるのは精神衛生上よろしくない。忍が影の中に居るのは分かっているの

だから、厳密には突然ではないのだが意識が向かなく事だつてあるわけ。

「ふむ。難儀じゃのう」

ふむ。もう一つ瞑目して、思案顔。そして。

「こんばんわ、阿良々木さん。いい夜ですね」

にぱっ、と眩しい笑顔。

「八九寺の真似ならちゃんと噛めよ!？」

全く。いきなりとんでもないことをしでかす奴だ。

「ふむ。お気に召さなんだか。儂が言うのもなんじゃが、かなり可愛いと思ったのじゃがな」

すごい自信だ。

いや、実際にかなり可愛いんだ。だけどそれは客観的に見ての話。僕の情動になんら働きかけるものはなかった。というか、ついさっき恋人と口付けを交わしたというのにすぐに他の女の子に移りとかありえないですから。そんなやつがいたらとりあえずぶん殴ってやりたい。

「鏡が必要かの、お前様」

「ん？ 顔の腫れはもう引いたし、いらないけど?」

「そうか…」

たまに変なことを言うなこいつは。
まあいい。それはともかく、だ。

「で、話して？」

「うむ。お前様にはこれだけは伝えておこうと思つてのじ」

すつ、と目を細めて忍が僕を見る。

子供っぽい外見とは違つ、大人の雰囲気。全てを悟りきつた、そんな無我の境地を思わせる空気。

「僕は今の生活に満足しておるよ」

まどろみにも似た、退屈で空虚な日々を。

「気まぐれに人と戯れることも、日の下を歩いてみることも、下らぬことに考えを巡らせてみることも」

天上の世界から、地上に降り立ったかのような。

「悪くない、と思つておる」

述懐。

「じゃが、失つて惜しいとも思わぬな」

お前。

それは。

「忍、お前、まだ死にたいのか？」

決定的な言葉。

いつかはつけなければならぬ”けじめ”。

羽川は”けじめ”をつけに行った。

忍、お前は僕にも”けじめ”をつける、とそう言っているのか。

それとも、ただ僕がその言葉の意味を勘繰りすぎているだけなのか。

「どうじゃろうなあ。さほど、生き死にに関心がない故な」

ロリなくせにやけにアダルティな忍。その真意を僕は見抜けないでいる。演技なのか本音なのか。

「ま、その時になってみねば分からぬのう。儂には前科がある」

死を超越した存在でありながら死を恐れ、血の涙を流しながら助けを求めたのも忍の偽らざる姿の一つ。僕が、忍を退治すると心に決めながら殺せなかったように。

人の心は移ろいやすいもの。

つまりはそういうこと。

「分からないなら、分からないって言え」

「分からん」

言われてしまった。

「じゃが、覚悟だけはしておるよ。儂はいつお前様に殺されて構わぬ」

「お前……」

「お前様一人の話ではない。あの娘と寄り添って行くのであれば、いずれはせねばならぬことである?」

言い返せない。

僕の身体は普通ではない。限りなく人間に近い怪異なのだ。

”人間ではない”ということ。

人ならぬ身で、人と共に生きることが出来ない。忍はそう言いたいのだろう。

それでも。

それでも、僕は。

「ま、好きにするがよい。しかし、忘れてくれるなよ、お前様」

自分で選んだことだろう?忍はそう言っているのだ。

僕は被害者ではなく加害者で。

どのように決着をつけることになるかと、僕は永久に咎を背負い続ける罪人だ。

忍に言われるまでもない。今は結論を出せずにいるけれど、いつかははじめをつける。

羽川ははじめをつけた。

次は僕の番だろう。

「忘れるもんか。僕はお前を許さないし、お前も僕を許さない。分かっているさ」

「…分かっておれば、それでよい」

この話はここでおしまい。とばかりに、忍は話を切り替える。

「あの娘、ハネカワといったかの？ あやつは、人間じゃったな？」

「え？ ああ。怪異は猫であつて、羽川じゃない。お前も知ってるだろ？」

春休みに、羽川の猫を退治するのに力を貸してくれたのは他ならぬ忍だ。

むしろ僕としては忍が羽川の名前を覚えたということが驚きに値するのだが。

「僕は、あの羽川という娘が恐ろしい」

「は？」

衝撃発言。

500年の時を生き、生きた伝説として語られる怪異の王。

鉄血にして熱血しにて冷血の吸血鬼。その成れの果てとはいえ、忍の口から”恐ろしい”などという台詞を聞くことになるうとは露ほども思っていないかった。

「僕は、初めて人間を恐ろしいと思った。餌としか思っておらんかった人間を、じゃ」

杭に聖水に十字架。

吸血鬼の弱点は数多くあるけれど、そのいずれも恐れない忍が、そのいずれをもたない人間、羽川を恐れるというのか？俄かには信じがたい話だ。

「吸血鬼殺し」

そう言ってもいい。

震えながらに忍は独白した。

「儂ら吸血鬼は、攻撃力に比べて防御力が低い。それは不死力が防御力に代わるからである、と」

その防御力は。

実は水増しされているのだという。

「強力な打撃を受けた部位は、霧と化して元の場所に戻る。」復元する”。お前様も覚えがあるじゃろ

「確かに、その通りだ。吸血鬼は自分の身体を霧にして移動することが出来る。その応用がああ超再生。僕はあれを復元だといったけれど、まさにその通りだったのだ。実際に再生している部分のみ不死力を消耗しているというのならまさに水増しされているということになる。そう考えるとなんかせこい気がしないでもない。」

「最も、儂ほどの力を持っておらねばそんなことはありえぬがな」

再生することなく死ぬ。そういうことなのか。

そういえば、ドラマツルギーは再生に随分かかるかかるといつていたっけ。復元力も再生のうち、ということか？

「うむ。それをあの娘は…」

夕闇の中、忍の顔色は青い。もとより白い肌だから、もう真っ青と違っていいくらい。耳元でかちかちと、歯が音を立てている有様。

「知ってか知らずか、器を壊さずに中身を破壊しにかかったのじゃ」

中身、とは内臓のことだろう。内臓をぶちまけるほどの攻撃力、というのもぞつとしない話なんだが。僕自身も経験した話。内臓をぶちまけるどころか、頭蓋を粉々に砕けるのが怪異のパワーだ。しかし、そのパワーを内部破壊にのみ向けたとき、どうなるかは想像に容易い。内臓がめちゃくちゃに掻き回されてミンチになる。内部破壊では霧になって復元することもできず、不死力を消耗して再生しなければならぬ。更に一瞬で”復元”するからこそ痛みが一瞬で済むのであって、内部破壊系の”再生”を強制する羽川の戦術は並々ならぬ”痛み”を伴う。しかもそれは不死力の続く限り、延々と続く。痛みを受け入れ続けなければならぬのだ。

身体特性は不死不滅の名を冠する吸血鬼であっても、その精神が痛みを許容できるかは別問題だ。いかに化物であっても、そのベースは脆い人間。悠久のときを経て、痛みすらも飼い殺しにした存在でもなければ壊れてしまう。

ましてや人間は痛み弱い生き物だ。生きたまま内臓をミキサーにかけられるなど、身の毛がよだつところの話じゃない。

「普通、怪異同士の戦いではそのようなことはありえぬ。我らのやり方は本来、生々しい力のぶつけ合いでしかない。そんな器用な真似はできぬよ、我らにはな」

それを、羽川はやった。猫の身体であれば僕を吹き飛ばすことくらいは簡単だったはず。いや、加減しなければそうなっていたはずだったのに。

そうはならなかったのだ。

羽川が加減した。もっとも吸血鬼に効果的な方法で攻撃を行った。それはいい。問題なのはそこじゃない。忍がトラウマを覚えるほ

どの残虐行為には薄ら寒いものを覚えるが、僕が気にしているのはそこじゃない。

羽川は全てを吐き出すことができたのだろうか。

僕はすぐに意識を失ってしまったからあいつがどんな想いでいたのかは分からない。

あの羽川のことだ。自分のことより他人の心配をして遠慮してしまっただけかもしれない。

そう思うと自分の不甲斐なさに腹が立ち、そして怖くなる。自信過剰で、軽率だった。

あまりに不用意に人の心の闇に踏み込みすぎた。羽川の積年の想いを受け止めようなんて大それたことをしようとしたのだ。それは僕の意味には間違いなかったのだけどあまりにも無力だった。ただか数十年の人生経験しかない若輩者のくせに。羽川ほどの能力もありはしないくせに。

それでもなんとか生きているのは吸血鬼体質のお陰。僕が機転を利かせたわけでも知恵を使ってなんとかしたわけでもない。

僕の力ではない。

ただ、本当に運が良かっただけの話。

運良く羽川の気持ち晴れただけ。あるいは羽川に助けられただけの話。

「ほんに、のう。生きておるのはお前様の幸運とあの娘の器量のお陰じゃな」

はあ。

正論過ぎて言葉もない。改めて考えても、気が大きくなっていたと思う。

羽川と一緒に過ごした日々の中で、僕は賢く、強くなっただけでいた。それが自信過剰。

愚昧。愚行。無知。愚か。

「マジへこみだなあ」

ひよとしなくても馬鹿なのだろう、僕は。

いつもいつも後悔ばかり。後になって”ああすれば”、”こうすれば”。

あれれ？でも意外と僕は悔やんではないかも。思い返してみれば色々とケチをつけたりはしても、悔いてはないように思う。強いてあげるなら春休みのことくらい。それすら今は悔いとは思っていない。

ああ、だから僕は繰り返すのか。死ぬような目に会っても、なんとかなってしまっただから。何度も繰り返すのか。取り返しのつかない過ちを犯すまで？

度し難い阿呆だ。

救いようのない愚か者。

「これはでっかい宿題ができたなあ」

どうせ、この性格は変えられないだろうし。ならば、羽川と同じ高みにまで登りつめるしかない。全てを見通すかのような、あの境地にまで。

すぐ傍に目標があるのはいいけど、でかすぎるな。しかし、頑張るしかない。

「そういうことじゃ。学習能力の低いお前様のことじゃ。いつまでかかるか、全く想像もつかんな」

言って意地悪な笑み。清々しいまでの大笑い。

いい気分だ。ボロボロの割には悪くない。僕も忍に釣られるように笑う。

次はもっとうまくやってみせるさ。

今に見ている、愚か者の僕。

二人の笑声に唱和するように、携帯が鳴った。

興味がないようなふりをしてた（後書き）

おつかれさまでした。

旧タイトル、君の知らない家物語完結です。

なんだか、前後編通してシリアスで通してしまいました。しかし、この問題は二人にとって決して避けては通れない道だと思っています。極めて個人的な妄想ではありますが、羽川さんの家騒動はこれで解決。

さて、次はどうしようかな。

言ってしまはん(前書き)

今回は短いです。

そういえば、阿良々木くんは本編でも言っでなかったような…？

言っつらん

僕、阿良々木暦は悩んでいた。

深刻といえは深刻。

どうでもいいといえば、どうでもいいような類の悩み。

しかし僕にとってはとても大切で重要な問題だった。

母の日よりちょっと前。GWが明けてすぐのことだったが、僕は羽川から告白された。多少の戸惑いはあったものの、僕は告白を受け入れて交際がスタートしたのだった。

そして今日まではほぼ毎日、少なくとも時間を共有してきた。

恋人同士の甘美な時間、とはいえないものの。有意義なものであったのは言うまでもない。ちょっと、普通とはいえない日々かもしれないが、僕たちなりに関係を進展させてきたつもりだ。経過は到って良好。喧嘩なども全くなく、お互いに尊重しあい、認め合える平和な日々だ。

…お互いに、解決すべき問題は多いけれど。

しかし、問題なのはそういうことじゃあない。

これは僕だけの、極めて個人的な問題だ。

実は僕、羽川の告白に明確な返事を返していない。あ、いや。この言い方は正しくないか。

羽川が「好き」と言ってくれたのに、僕はまだ自分の気持ちを伝えられていないのだ。羽川のことだから、僕がもうすっかり骨抜きでベタ惚れなのを知っているだろうけど、そうじゃない。

僕が、きちんと羽川に気持ちを伝えること。

それが今の僕がやらなければならないことだ。

…まあ、それも簡単じゃないんだけど。なんでかって？それは、チキンだからですよ。そりゃあ、ため息も出るってもんだ。

…自分の不甲斐なさに。

「はあ…」

「どうかした？ 悩み事なら、相談に乗るけど」

「ああ、実はさ。僕、まだ彼女に『好きだ』ってちゃんと伝えてないんだよ。付き合い始めて、もう結構経つのに」

「言えばいいじゃない。あ、それともなに？ タイミングが掴めなくて言えないとか」

「ご名答。いい雰囲気になったりしたときはさ、他に言わなくちゃいけないことがあったりでき、言えずじまい」

「んん。そういうものなんだ？」

「そういうものなんです」

はて。

ここでクエスチョン。

僕は一体誰と話しているのでしょうか？

「阿良々木くん、おっはよー」

えーと。

はい。

” 答えはCMの後で ” も、 ” 続きはWEBで ” も言う前にご登場なさったのはマイラー、恋人であらせられる羽川翼さまでした。さて。

僕は独り言のつもりでさっきの呟きを零していたわけでありまして。相槌とかはきくと僕の内面から出てきた幻聴の類だと思っています

たわけですよ。

それがまさかご本人様だったなんてっ!?

学校への登校途中。それも羽川とタイミングを合わせて家を出ているのだから、合流して当然なんだけど、すっかり失念していた。僕のミスだ。

「それにしても阿良々木くん。さきさらっと凄いを言ったように聞こえたのだけれど」

「そ、そうか？ 至って当然、当たり前のことを言っただけだっけ？」

「んん？ 本当に？」

誤魔化そうかと一瞬考えて、すぐに諦めた。精々足掻いてみようか、とかそんな気は起きもなかった。羽川さん。いや、羽川様が邪悪な笑みを浮かべていらっしやっただから。ちなみに”邪悪”というのは僕の極端な比喩表現。事実とは異なります。本当は、ちよつと子供っぽい、悪戯な笑みだ。

両親との和解を機に、羽川はそんな表情を見せるようになった。

「私はずいぶん勇気を出して言っただけだなー。阿良々木くんはそうでもないんだねー」

「心にもないことを言うなよっ!？」

口に出したつもりはなかった言葉だ、そりゃ淡白にもなるわい！

「じゃあ」

羽川はそこで一度言葉を切って。

「次は、本気で言ってくれる？」

のたもつた。

「あ……う……」

超可愛い。

道端で、人の目があるような場所で、羽川は素顔をさらしたりはしない。

いつも通りの笑顔。特別、頬を赤らめたりしているわけでもない。ただただ、普通にしている羽川に僕が照れているだけ。

そう、僕の防御力が下がっているだけ。

…一体どれだけ惚れてるんだ、僕は。振られたりでもしたら自殺しかねないな。死ぬるかどうかは知らないけど。

「あつはー。困らせちゃったかな。」

大丈夫だよ、阿良々木くん。ちゃんとして、分かっているから」

そんなに真つ赤な顔されちゃ、気づかない方が難しいよ。

うん。幸せだ。

僕は、とても幸せなのだと思う。

言わずとも伝わる、一方通行の読心術だったりするけど。こんなに幸せなことはない。

でも、幸せだからこそ、言わなければいけないこともある。

幸せであり続けるための努力を決して怠ってはいけないのだ。

だから、僕が言わなければ。

「羽川。帰りに、少しいいか」

真っ赤な顔で何を言っているんだ、僕は。
でも、羽川は。
そんな僕を笑わずに、静かに頷いた。

* * *

夕方。

僕と羽川は無言のまま校門をくぐって公園に来た。

今日一日かけて覚悟は決めてきた。

事あるごとにその脆弱性を露呈しまくっている僕のメンタルだけ
ど、今日こそは大丈夫。…いつもそう言っていてダメだったりするけど、
今回ばかりは大丈夫だ。

はじめからの出来レース。

解答の知らされているテストと同じ。

分かりきっていることの確認。

そのはずなのに。

「羽川」

心臓の音が五月蠅い。

頭に血が上っている。

世界がぐるぐる廻りだす。

酔っ払いか、僕は。

大きく息を吐く。肺から空気を搾り出す。

そして目一杯空気を取り入れたら、あとは言葉にするだけ。

根性見せる、僕のチキンハート！

「結構前から、貴女のことが好きでした！

よろしければ、お付き合ってください！」

かばつ、と頭を下げた。

気の利いた台詞の一つも出て来やしねえ！

覚悟を決めることだけで頭が一杯で告白の中身なんてまるつきり考えていなかった。

うわつ、僕は一体何を言ったんだろつ。超恥ずかしい。軽く逃げ出したい。ベッドに逃げ込んで頭から毛布を被っていじけたい。

……でも、羽川は笑わない。

柔らかな微笑を浮かべたまま僕が頭を上げるのを待っていた。

「ありがとう、阿良々木くん。私も、阿良々木くんのこと大好きだよ」

……なんだろう。

羽川がそう思ってくれているのは、分かっているのに。

どうして何も考えられなくなるくらいに、頭の中が真っ白になるのか。暴風のように感情が荒れ狂っている。

これは　　歡喜。

僕は、嬉しいのだ。

羽川に気持ちを伝えられて嬉しい。

羽川に「好き」と言って貰えて嬉しい。

独りでは絶対に知ることのできなかつた気持ち。

大切な、大切な気持ち。

やばい。

泣きそうだ。

高校に入ってから、ずっと友達なんか作らずにいた。

二年の終わり、春休みには人間強度なんがどうこう、なんて思うようになっていた。

でも、最初はそうじゃなかった。

本当になんでこんなことを思ったのか分からない。勉強について

いけなくて、テストが散々で、何もかもが上手くいかなくて。

僕は一人になりたかった。

一人になって。

寂しくなった。

でもこれは僕自身が望んだことだ。そんな風に、変に格好をつけて…本当に独りになった。

人間強度。

それは。

自分誤魔化す魔法だった。

そんな僕が、今は彼女が居て。想いを伝えて。「好き」と言ってもらえて。こんなに幸せなんだ。

涙のひとつやふたつ、見せてもいい場面だろう。

春休みの自暴自棄になって、途方に暮れて、泣きそうになっていたよりは遥かに真つ当な理由だ。

「阿良々木くん、帰ろうか」

ずっと差し出されてる手。

僕はそれをしっかり握ってゆっくり歩き始める。心もちゅっくりを心がけて。

ひどく心細かった。

顧みてもどうしようもない過去が、どうしようもなく思い出されてしまったて心細くなってしまったていた。

多分、分かってしまっているんだろっなあ、羽川は。

本当に、いろいろと鋭いやつだから。

だから、素直に甘えてしまおう。明日はもう泣かずに済むように。僕にだってそれくらいのことではできる。

「阿良々木くん」

「ん？」

「今日は後ろに乗せてもらっていいかな」

「……いいのか？」

「うん。今日は特別」

嬉しいのは、僕だけじゃないのかもしれない。
それとも、ただの気まぐれか。

「教えてあげない」

夕陽に笑顔が映える。
つたく。本当にいい表情かおをするようになった。
あるいは、僕もそうなのだろうか。

「全部、阿良々木くんのおかげだね」

全く。

僕の恋人は凄いやつなのだ。とんでもない規格外。
そんな僕が羽川に伝える台詞は少ない。だから。僕は万感の想いをこめてこの言葉を贈る。

「本当に、お前はなんでも知ってるな」

「なんでもは知らないわよ」

「知ってることだけ、か？」

「んん。ちょっと違うかな」

歩みを止めた羽川につられるように僕も足を止めて羽川を見る。

「阿良々木くんのことだけ」

えっへへ。

夕陽をを背負い、ちょびつと舌を出して照れ笑いをする羽川は、最高に可愛い僕の彼女だ。

言ってらん(後書き)

もうちょっとなにか書こうかと思いましたがまとまらなかったの
別の機会に。言わせたいことは言わせたいつもりです(笑)

驚かないで（前書き）

6000アクセス、10000ユニーク突破！

読者の皆様には感謝で一杯です。

私の妄想が尽き果てるまでは書き続けていきたいと思っておりますので、どうかよろしく願います。

驚かないで

”男に二言はない”

なんてのは仁侠映画や啖呵を切るときによく使われる台詞だ。もしくはほとんどもない約束を履行させられるときに自身を鼓舞するのに。あるいは、謙虚過ぎる相手に対して発破をかけるとき。

格好いい台詞には目がない、と自負している僕としては冗談半分などではなく、本気で言ってみたい台詞の上位にランクインする台詞だと思う。

しかし、現実というヤツはどこまでも残酷で非常なもの。そんな台詞に出番はない。あったとしても、それは墓穴を掘る類の使い方しかされない。自分の首を絞めるといふオチとセットなのが現代の通例だ。

具体的には、今。

この時に。

* * *

夕刻。

僕は自室で羽川と向かい合って座っている。

正座で。

事の原因は僕。

より正確を期すのであれば、僕の勢いで口から突いて出た言葉、ということになるのか。

そう、いつも通りだったはずなのだ。

普段となんら変わることはないはずの日常。

羽川の歩幅くらいに全く変わることのないはずの毎日だったのだ。朝。早めに家を出て、朝の教室で羽川に勉強を見てもらって授業を受ける。

昼。昼食を取りつつ、羽川に授業の解説と補足をしてもらい、午

後の授業。

放課後。その日の復習と翌日の予習。その後は羽川と阿良々木家に帰宅し、過去の復習と受験勉強。

一日の終わりに羽川を家まで送って行って自習となる。

……自分で振り返っておいてなんだけど、凄い生活だ。そんな毎日にも不満の欠片も出ないのが不思議なくらいだ。

そんなタフで優しい、いつも通りの予定は羽川の一言で崩れ去った。

部屋に入るなり、羽川はこうのたもった。

「阿良々木くん。大切な、大切なお話があります」

…なんだろう。

期末テストが近いのは分かるけど、その勉強もきっちりやっている。それに八九寺に余計なちょっかきも出してないし、戦場ヶ原に誘惑されてもいなければ神原に襲われてもいない。火憐ちゃんと月火ちゃん、それと千石の勉強を少し見てやったけど、自分の勉強はおろそかにもしていない。最近のことを振り返ってみても羽川に叱られるようなことは何もしていないつもりなんだが。はて？

「私は、いつ泊まりに来たらいいのかな」

…。

……。

……。

「はい？」

「だから、いつがいいかな。って」

「その後だ。その後」

「泊まりに来たらいいのかな？」

「泊まり!？」

「んん？ 私、何か変なこと言ったかな」

僕が錯乱しているのか、羽川がご乱心なのか。過去のデータから推測するに、僕が錯乱している可能性が著しく高いと予想される。

勉強のしすぎで壊れたか？ 慣れない事するから…。

って、そうじゃない。思考を止めるな。考えることを放棄するな。逃げ出すな！

僕は多分正常だし、羽川もいつも通り。

コンディション・オールグリーン。

では考える。

レッツ・シンキン。

羽川がウチに泊まりに来る。

僕はそんな約束をしていないし、話をした覚えもない。じゃあ、他に可能性があるのは火憐ちゃんと月火ちゃんか。僕の自慢の妹たち、ファイヤーシスターズ。二人は羽川ともうすっかり姉妹のような関係だから更に仲を深めるべく、お泊り会でも企画したのだろう。そう考えるのが自然だ。そうに違いない。

「いや、火憐ちゃんと月火ちゃんとだろ？ 僕に聞くのは筋違いじゃないのか？」

「んん？ なんの話？」

「あれ？」

外した？

推理小説なんかを読んでも犯人予想が的中したことのない僕だけ
ど、殊羽川に関連することではそれなりの予測精度を保持している
つもりだったのに。軽くシヨックだ。

「阿良々木くんが言ったんじゃない」

「……………」

僕が？

羽川に？

家に泊まりに来いと？

「……………言いましたか、僕は。そんなことを？」

思わず倒置法。

それはともかく。

そのような事実は記憶に御座いませぬ。政治家が汚職を否定する
言い回しそのままだが、結構真剣に。もとい本気で。

そんな僕の返事は予想通りであったのだろう。

目を伏せて、謳い上げるように、僕に証拠を提示してみせる。

「『代わりに、今度一晩抱き枕な。エロスありで』」

一語一句、僕が言い捨てたであろうイントネーション、音程まで
も完全に再現した匠の技で。

どのような聞き間違いも起こり得ぬような滑舌と、福音の如き音
律を以って僕に突きつけられた。

下手をすれば卒倒しそうな素晴らしい御声だったのだが、言って

ることが僕の妄想丸出しの低俗なのがとてもシユールだ。

そんな僕の感想はとりあえず置くとして。

そういえば、そんなことを言ったような気がします。

ほんの数日前の出来事のはずだが、酷く遠い日の出来事のように思える。

…回りくどい言い方をやめて、正直に申し上げますと。

忘れておりました。

トンでもないスプラッタな出来事とその直後にございまして、忘れてしまったのも無理らしからぬことではないかと。そんな風に自己弁護してみる。頭部への連続した強打がその原因だと思っております。…まあ、それは口にするまい。遠慮なくやれ、って言ったの僕だし。

「…えーっと」

どうしよう。

大ピンチだ。

身から出た錆とは正にこのこと。

「阿良々木くんは紳士だから、約束を撤回したりしないよね？」

…どうして僕がプレッシャーを掛けられているのだろうか。普通は立場が逆じゃないのか、とか思っただけだ。

とりあえず今は何かを言わなければならぬ。

このピンチを切り抜けるために。

僕の貞操を守るために！

「……い、言い訳をさせてください」

「気の利いた言い訳を期待します」

更にプレッシャー。

おいおい、羽川。僕を追い詰めたところでいいことなんてひとつもありはしないんだぜ？

それに、お泊り云々はその場の勢いで言ってしまっただけで、なにも実現させるつもりはなかったのだ。「そんなことも言ったね、あはは」みたいな冗談で済ませるつもりだった。羽川が本気で受け取っているとは思わなかったのだ。

むしろ、それこそが盲点だったのか。

羽川はむしろその”冗談”を狙っていた？

本気で？

ちらり、と盗み見た羽川の表情は真剣そのもの。鬼気迫るモノがある。

へたなことを言えば酷い目に会うことは間違いないだろう。

まさか羽川がそんなことをするはずが、とも思うのだが今回に限っては自信がない。

なんせ僕には前科がある。

散々羽川に恥ずかしい思いをさせた拳句に、女としての恥をかかせたのだ。彼女はなにかもを覚悟してすら居たというのに。我が事ながら恥ずかしい限りだ。まあ、そのお蔭で今は羽川と恋人同士のんだけど、それで過去が変わるわけではない。

故に、二度目はない。言葉は貴重なのだ。

大丈夫、羽川は急いではない。慎重に考える。

まずは僕の気持ちからだ。

僕も健全な男子だから、”そういうこと”に全く興味がないわけじゃない。つつい、羽川をやましい目で見てしまうこともある。けれど、僕たちはまだ高校生で、それも受験生だ。”そういうこと”はまだ早い。

それに、あの時の羽川にはそれ相応の対価を示さなければ納得しないだろう、という考えもあった。それと場を明るくする軽口。…

…そのつもりがこの窮状。

口は災いの元、とはよくいったものだと思う。

僕の思いはどうあれ、羽川は本気だ。もしかしたら、高等なフェイクなのかもしれないが、僕の眼力では見抜けない。

ではどうするか。

平謝りで許された前回とは違う。何らかの賠償を負^{ペナルティ}つことくらいは覚悟しなければならぬだろう。

ともかく、『一晩抱き枕・エロスあり』を回避しなければならぬ。そうすれば、あとはどうとでもなる！…多分！

「交渉の余地はあるのでしょうか」

僕は自発的に床に正座。

「へえ、交渉？ いいでしょう、阿良々木くん。お話を伺いましょう」

第一段階はクリア。

しかし、ここからが本番だ。

あくまでも下手に、立場をわきまえつつも本心を訴え理解と譲歩を引きずり出す！

「お泊りの件なのですが」

「うん。エロスありのお泊りがどうかした？」

けほ。

あからさまに避けている部分をこつもあつさり！

女子はこついつの、あんまり抵抗とかないんだろつか。

しかし、この程度で怯んでいては交渉などできようはずもない！

「そのお泊りの件なのですが！ 私どもはまだ高校生で、そのようなことをいたすのは道徳的にどうなのかと思う次第なのであります！」

「うん。それで？」

「私といたしましてはエロスなしの他方面への路線変更をお願いしたく！」

「それじゃ嘆願でしょ。私たちは交渉をしているんじゃないっけ」

いつのまにか僕の目の前で律儀に正座をしている羽川は、柔和な笑みのまま問題を指摘してくれる。

「阿良々木くんの悪い癖だよ？ 論点の主旨がよくズレるの、気をつけないと」

小論文、マイナス十五点。

「はい、訂正して」

「エロスありのお泊りを中止して頂きたくっ！」

「ん。少しはマシになったね。それで、そのことで私にメリットはあるのかな？」

「はいっ、代わりとってはなんです私を煮るなり焼くなりして頂いて結構ですっ」

「言いたいことは、それだけ？」

微笑ましげに、僕を見つめる羽川の目が、何か忘れてない？と聞いている。

忘れて…。

…忘れて…？

……あ。

「エロスなしであれば、なんでも！」

危ねえ！

例え揚げ足取りでしかなくても、言ったことは確かなんだから、きちんと条件をつけておかないと交渉した意味すらなくなってしまう。

「つまり、エロスなしなら私の好きなようにしていい、と。そう思っているのね？」

「はいっ」

「では、そのように」

お許しが出た。

なんとかなった、のか？

「阿良々木くん」

「ん？」

「覚悟しておいてね」

「…はい」

そう、羽川が締めくくって、勉強の用意を始める。

僕はといえば交渉にもなっていない、いかにもお粗末なものだったにも関わらず疲れきっていた。

でも、羽川のことだ。多分これくらいのこととは想定済みだったに違いない。ぐったりと倒れこむ僕を羽川が優しい目で見ている。

「でも、阿良々木くん」

「なんだ、まだなにかあるのか？」

「うん。本当にいいの？」

「ん？」

「んん。阿良々木くんがいつになっても言い出してくれないから私から聞いたんだけど、こんなつもりはなかったんだよ」

阿良々木くんが責められる理由なんてなにもないでしょ？と。

全くその通りだ。

立場が逆のはずなのだ。僕が羽川に要求をする立場だったはず。

…すっかり忘れていたんだけど。しかし、実際には羽川の願いを聞くことになっている。普通に変な話だ。あ、羽川に恥をかかせた負い目があるのは確かだけど。

「阿良々木くんは、なにか他にしてほしいことはないの？」

話し初めとは一転、弱気な羽川。
いやまあ。僕が勝手に暴走して先走ったからこんなことになって
いる、というのも事実なんだけど。

「他に、ねえ」

つまりは、代案があればそれでもいい。と羽川は譲歩してくれて
いる。

しかし 思いつかない。

現状に不満でもあれば希望の一つや二つ簡単に出てくるかもしれ
ないが、今の僕は満ち足りすぎている。許容量一杯だ。幸せすぎて
怖いくらいだ。これ以上を望んでは罰が当たる。

「やっぱり、ないな」

「…そ」

「男に二言はない。好きにしてくれていい」

僕は少しだけ嘘をついた。

希望なんてない、と言って初めて思いついた望みだ。

羽川のことをもっと知りたい。

羽川の気持ちにもっと寄り添いたい。

それが僕の願い。僕の望み。

……なんか僕、格好いいんじゃない？

「気のせい」

「やっぱりダメですか」

「阿良々木くんは普段通りが一番だよ」

嬉しいことを言ってくれ。

「じゃ、いつも通り勉強しようか」

「…だな」

結局そこに落ち着くのか。と思わなくてもいい。でも、多分そこが僕たちらしい在り方だろう。

すっかり準備完了の羽川に置いていかれないように僕も急いで準備をする。

これでいつも通り。

多分、明日からは少しだけ違ういつもになるのだろうけど、まあそれもいいだろう。

「で、なに飲む？」

「紅茶。ストレートで」

それは。

いつの間にか、僕の部屋にお揃いのティーセットが置かれるようになったくらい、自然な変化だろう。

それは、とても幸せな。

驚かないで（後書き）

昔の人はうまいこと言ったものだと思いました。

しかし、なんでこころも阿良々木くんは地雷を踏みに行くんでしょうか。ドMなのは間違いないけれど（笑）

聞いてよ(前書き)

最近、どんどん文章が短くなっていきます(笑)

聞いてよ

「なあ、羽川。お前は僕のどこが好きになっただんだ？」

白い天井を見上げながら、隣に寝転んでいる羽川に問いかける。

「んん？ どうしたの。突然」

どうして、か。

「いや、なんとなく」

気になって。とはいえなかった。

言葉の端々から、僕の思っていることを悟られそう。

「……怖い？」

そんな僕の気持ちはお構いなしに、話の核心を突いてくる。それはもう、嫌味のように。

「……ああ、怖い」

どうして羽川が僕と付き合っているのか。どうして僕なのか。それが知りたかった。

好きとか嫌いとかに理由は要らないなんて言うけれど、そんなのは嘘っぱちだと思う。好きなことに理由はなくても、きっかけくらいはあるだろう。だったら、それが好きな理由だ、と僕は考えている。

羽川は一体僕のどこが好きになったのだろう。

僕には羽川に好かれるようなところはひとつもない。少なくとも僕はそう思う。

羽川は誰にも告白されたことがない、って言ってたけど。最近はそのでもないらしい。「くんから告白されたらしいよ」なんて話も聞こえてくる。

…ぶっちゃけると、どこが好きだとかはどうでもいい。ただ不安なのだ。

耳に入る雑音が、行き交う言葉が。

羽川と一緒に居た時間が決して薄っぺらなものだとは思わないけれど、それでも不安だった。だから、こんなことを言ってしまったのだ。でも。

「私も怖いよ。」

誰かに阿良々木くんのこと、取られちゃうんじゃないかって。

前にも言ったよね。阿良々木くんって結構人気あるんだよ。

クラスの友達が阿良々木くんのことを話してるだけで、不安。

戦場ヶ原さんや神原さんの名前が阿良々木くんの口から出るだけでびくびくしてる」

それは羽川も一緒だった。

羽川は僕が思っているよりもずっと普通の女の子だった。

失うことに慣れすぎた羽川が、ようやく掴んだ幸せ。というのは少し格好を付け過ぎだろうか。

僕自身が彼女の幸せなのだと考えるのは、自信過剰だろうか。

「そっか。少し安心した」

「んん。なんか釈然としないなあ」

「僕も不安だったよ。人の評価が気になるようなキャラじゃないけどさ、彼女が人気者って、なんか嫉妬する」

「その点、私は安心かな？ 不謹慎だけど、阿良々木くんが友達が少なくてよかった」

「…ほんと不謹慎だ」

「あつはー。ごめんごめん。」

でもね？ 最近放課後の呼び出しが多いのは阿良々木くんのせいだよ」

なんと。

「全く、不愉快で迷惑な話だね。」

『あんな奴より俺の方がいいに決まってるって！』だって。一体なにがどう決まっているのか説明してほしいよね」

「あー…」

そういうことか。

今まで完璧すぎて浮いた話の一つも出ることが無かった羽川翼に、用具箱程度の存在でしかなかった僕という彼氏ができて今まで静観していたやつらが動き出した。

しかも、相手は格下。

動かぬ道理はない。
なるほど。

確かに僕のせいだ。

「あんまり腹が立ったから、言ってやったの。」

『じゃあ、あなたは私のために死んでくれますか』って

うわ。羽川さん、大胆。

「面白い顔してだろう、それ」

「その人たちには悪いんだけど、面白かったよ」

軽々しく死ぬ、なんて言葉を用いるべきではないのだろうけれど。

恋仲を別にしても、僕たちはそういう仲だ。

恋人同士であれば、それは当然。

歪で真剣で重過ぎる関係。

…結婚ともなればどんな関係になっているのやら。

今から将来が不安です。

「そうか」

「うん」

沈黙。

ただお互いの腕を枕に天井を見上げる。

同じところを見てはいないだろう。でも、同じところを見てたらいいな、なんて子供染みたことを思う。

「ねえ、阿良々木くん」

「ん？」

「どこが好きか、教えただげよっか」

「んー？ 別にいいや」

「むー。阿良々木くんが意地悪だ。

でも、私が言いたいから勝手に言っね」

裏技発動。

自己満足。

これは一本取られたな。今度僕も使おう。

「私は、阿良々木くんの隣にいるのが好き」

「なんだそりゃ」

「自分でもよく分からないんだけどね。

渡したくない、って強く思うの。誰にも、渡したくない」

腕枕越しに、羽川の身体が強張るのを感じる。

多分、険しい表情をしているんだろうな。

「心配するな、羽川」

枕にしていた腕を畳んで、羽川の頭を自分の方へ抱き寄せせる。

「お前が見込んだ絶滅天然記念物級の鈍さは健在だ。

誰かが好意を寄せてくれても気付きやしないさ」

仮に気付いたとしても、それに応えることはない。

想いを伝えられても、応えることはない。

それくらい、僕は羽川翼という女性ひとを愛してしまっているから。

「ん」

それに応えるように、羽川も頭を僕のほうに寄せてくる。見てはいないけど、そのしぐさが猫っぽくて微笑ましい。こんな話をしている分には、全く以って普通の女の子だ。

しかし、この状況。部屋で床に寝転び、半ば抱き合うような形になつてゐるわけだが。この瞬間に火憐ちゃんか月火ちゃんのどちらかでも、部屋に入ってくるようなことがあれば、コブラツイストか下ろし金の刑にでも処されかねない。ちなみに、二人ともノックなどをする常識も持ち合わせてない。

「あは、大丈夫だよ。阿良々木くん」

「読まれた!？」

「ご両親は仕事で遅くなるみたいだし、火憐ちゃんも月火ちゃんも今日はボランティアで遅くなるみたいだから」

「華麗にスルーされた挙句、家族の生活パターンが把握されている!？」

火憐ちゃんと月火ちゃんはまだ分かる。

よほど波長が合うのだろうか、もうほとんど姉妹みたいなものだからそういうことも知っているかもしれない。

しかし、どうして僕の両親の行動パターンまで把握できるというのか。

「さっき、今日は遅くなりますってメールが」

「どうして僕じゃなくて羽川に連絡するんだよ!..」

全く理解しがたい両親だ。

「息子のことをよろしく頼む。って」

「.....」

今日は家族会議を提案しよう。

「だから、今日はもう少しこのままで、ね？」

.....あながち、悪いことばかりでもないかもしれない。

そう思わされてしまうのは、羽川が凄いのか。僕がへタレなのか。悩ましいことではあるけれど。

それは、とても贅沢な悩みだろう。

聞いてよ（後書き）

羽川さんと阿良々木くん。

この二人が話をすると絶対何かお題目が必要、とそんな脅迫感を感じます。どんな会話をしても難しい話が絡んでくる感じですよ。

本当に恋人同士なんでしょうか、こいつら（笑）

どうしたい？（前書き）

15000アクセス、3000ユニーク突破！

皆様が読んでくださることが私の活力です。これからも頑張ってくださいののでよろしくお願いします。

どうしたい？

「失礼しましたー」

言って、職員室のドアを静かに閉めた。

「ふう」

ひとつため息をついて、教室へと足を向ける。なにも、悪いことをしたわけじゃない。ただ、勉強において劣等生である僕

としては、放課後の職員室というのは酷く居心地の悪いものなのだ。クラブ活動に力を入れていないこともあつて教師たちのほとんどが職員室に居るのであるから当然かもしれない。…しかも、なじ数学の成績だけは良いために他の教科で手を抜いていると誤解されているから困りものだ。数学のできるやつは勉強全般が得意だと思ひ込んでいる人は多いがそんなのはただの都市伝説だ。

都市伝説も馬鹿にできないけどな。

怪異に出会ってしまった身としては、本当に。

「あ、阿良々木くん。お話はもう済んだの？」

教室の主よろしく、窓際の席で一人佇たたずんでいた羽川が言う。

このクラスに果たして担任は必要なのかと、担任自身に言わしめた完全無欠の委員長。

でも、それはただの見せ掛けで、本当はただの女の子であることを僕は知っている。多分、僕だけが知っている。

「ああ、大した話じゃ無かったよ」

「やっぱり、成績の話だった？」

「この調子で頑張れ、だとき。頭痛の種が一つ減って、せいせいしてるんじゃないか？」

「そんな風に言わないの。激励してくれてるんじゃない」

「どうだか」

「ひねくれてるなあ」

羽川は苦笑い。

まあ、僕がひねくれているのは元からだし、それは羽川もよく分かっている。

なにせ、左利きでもないくせに右手に腕時計を巻いているくらいだから。…最近、大人しく左手にしていることが多いけど。勉強するのに、凄く邪魔なんだよな。アレ。僕の成績が振るわなかった一因かもしれない。

それはともかく。

先日、待ちに待った期末試験があった。

その結果は上々で、下の下程度の成績だった僕が総合すれば平均点よりほんの少し上、という成績を残した。その結果を見ての担任からの呼び出しだった。

数学以外の全教科がほとんど赤点ギリギリの低空飛行であったのが、ムラはあるものの軒並み平均点近くまで押し上げてきたとなれば、呼び出されもする。

苦手教科の世界史などでも、平均点には届かないものの最低限押さえて置くべきところが全て正解していた。そんな、まずまずの結果に自己採点を手伝ってくれた羽川も満足気になっていた。

「順調順調。阿良々木くんは真剣に勉強を始めてからまだ日が浅いからこれからだよ」

とまあ、今回も全教科満点をたたき出し、その名を直江津高校の歴史に刻み付けた羽川からの激励を頂戴した。お前に言われると、本当に大丈夫に思えてくるから不思議だ。

普通なら当然陥るはずのスランプも全く皆無。モチベーションの低下すらないという快進撃。つい自分が特別な人間だと勘違いしてしまいそうになるが、多分これは羽川効果だろう。羽川に勉強を見てもらえば猿でも英語を喋りかねない。

「そつえば、羽川。お前は進路どうするんだ？ 僕はさっき職員室で聞かれたけど」

「んん。実は私もまだ決めてないんだ。ちょっと、迷っちゃって」

「ふーん。でもさ、正直現実感薄いんだよな。進路って言われてもさ」

薄くて軽い。

羽川が僕を評して言った言葉だ。

状況に流されるばかりで、自己意識が希薄。明確な目標がなくて進むべき路を決められない。

僕は凧みたいなものだ。風のままに飛びもすれば落ちもする。今は羽川翼という大きな風に流されているだけ。運ばれているだけ。そこに明確な意思は、多分ない。

だから、僕は翼を持つ鳥ではなく凧なのだ。

…男としてはこれ以上に情けない姿も無いだろう。

「阿良々木くんは、なにがしたいの？」

なにがしたいのか。
どうしたいのか。

「私は　世界を見て廻りたいと思った」

羽川は窓の外を見る。放課後でも、夏の空はまだまだ明るい。

「でも、分からなくなつた。本当は、ただあの家から逃げ出したかっただけなのかもしれない」

無意識のうちに、そう思っていたのかもしれない。でも、今はその気持ちを自覚している。だから、世界を見て廻りたいという気持ち
が逃避のためなのか、それとも自分の気持ちなのか分からなくなっている。

「僕もさ、なにをしたいかは分からないけどさ。どうしたいかは決まってる」

「へえ、聞かせてもらってもいい？」

「羽川の傍にいたい」

…。

一瞬の沈黙。そして、大きく目を見開いた羽川翼。

「…っ！　阿良々木くん、それは殺し文句だよ」

羽川は顔を赤くして目を泳がせている。

うん。羽川の可愛い顔が見れて大満足。でも、冗談のつもりは無い。

羽川から学びたいことはもっとたくさんあるし、何よりも失いたくない。

「…でも、うん。そうだね。私も阿良々木くんの傍に居たいよ」

照れながらも律儀に返事をくれる、愛らしい彼女が好きだ。

「もう夏かあ。そろそろ大学入試が始まるね」

「正直、憂鬱だよ。少なくとも、この夏の間に進路を決めないといけない」

「そうだね」

二人、教室の窓から空を見る。

「なあ、羽川」

「ん？ どうしたの？」

「世界を見て廻るなら」

「うん。そのときはちゃんと言っから」

僕も連れて行ってくれ。

とは言わせてくれなかった。けど、多分伝わっているのだろう。

放課後。

二人きりの教室。

夏が、始まるうとしていた。

どうしたい？（後書き）

ご意見・ご感想などいただけると喜びます。また、誤字脱字なども
ありましたら是非お知らせください。

あの夏の日（前書き）

…本当は「ある夏の日」にしたいところですが（笑）

あの夏の日

突然、降って沸いた自由時間というものはどうにも持て余してしまふ。

日曜日。

土曜日にも半日授業がある直江津高校に通う身としては、日曜日というのは大切な休日といえる。

その反面、一日の大部分を占めるはずの授業がないためにその時間の使い道に困る、という事態も発生する。それこそ、普段からやることの決まった毎日を過ごしている弊害というやつだ。…まあ、単純に部活動などに参加していないからなのだけだ。

それでも今日までは時間の使い道に困るなどということはなかったのだ。

でも、いま羽川は僕の隣にいない。

どうして居ないのか？

別に、喧嘩をしたわけでも、振られたわけでもない。

今日は”家族”と出掛けている。

和解してから　いや、一緒に暮らすようになってから初めての家族での外出。

その前日の昨日。羽川はどこか上の空だったし、緊張しているようでもあった。

いつも夜の11時には就寝する羽川が真夜中の1時に「眠れない」と電話をしてきたくらいだ。

まあ、そんなわけで。僕は空いてしまった時間を持て余している。同時に羽川の存在の大きさに打ちひしがれてもいる。

付き合うようになってから、一日のほとんどを羽川と一緒に過ごしてきたのだ、ということに今更ながらに気付く。

クラスでは委員長と副委員長。

放課後は恋人同士で先生と生徒。夜も結構遅くまで一緒にいるのが常だ。…家族と和解してからは少し早く帰るようになったけれど、それでも日中はほとんど一緒にいる。そんな二ヶ月間だった。

だからか。

酷く物足りないのは。

部屋に居ても、ここにはいない三つ編みの似合う彼女を探してしまっ。

…寂しいのだろう、僕は。

すっかり早起きの習慣が身に染み付いてしまっ、折角の日曜日を寝て過ごすこともできやしない。毎朝の日課になった英単語の記憶も一時間も立たずに終わってしまう。ノルマを倍にしたって三倍にしたって、かかる時間はそう変わらない。スペルと意味の関連付けをして、要領良く記憶していくだけ。あとは反復練習。「一度にたくさん覚えることを覚えようとしても効果が薄くなるだけ。少しずつ、確実に覚えていくのがコツ」とは羽川の談。

窓の外には憎たらしいほどの青い空が広がっている。

もう季節はすっかり夏だ。

白い雲が気ままに流れていくのを見て。

蝉の大合唱に耳を傾けながら。

思いついた。

「久し振りに、行って見るか」

* * *

午前中とはいえ夏の日差しは強い。

それでも、風を切って走るのは気分がいいものだ。

…これが愛車のマウンテンバイクであれば何も文句はないのだが。

まあ、贅沢は言うまい。

しかし、ママチャリとはいえ、やはり自転車はいい。
少し苦しい上り坂も。

緩やかに下る坂道も。

そこから見える景色すら少しばかり違って見える。

全てが愛しく感じられる。

自転車に乗るのは本当に久しぶりだった。

羽川と付き合うようになってからの数ヶ月というもの、自転車の
出番がめつきり少なくなってしまうていたのだ。

登下校は羽川と一緒にだから必然的に歩きになる。なので、自転車
に乗る機会といえば羽川を家に送っていった帰りくらいだ。

それすらも最近は頻繁に顔を見せるようになった忍と話しながら
だ。

そんなわけで、意識して自転車に乗る。

趣味のツーリングとしての自転車は随分ご無沙汰だったというわ
けだ。

「ぶかー」

午前中一杯、市内を走り回って公園で一服。

妙な擬音が口から突いて出たのは、寝そべったベンチから見上げ
た雲に感化されたせいだろうか。それとも、なにをするでもなくた
だ風の往くまま流されている姿に自身を重ねてみたか。

「あー」

雲を見上げて無意味な音を撒き散らす。

植物になりたい、なんて思ったことのある僕だけど、案外雲なん
ても悪くないんじゃないか、とか思ってみたり。

ああ、でも雲はいずれその重みに耐え切れずに大地に還る。

なかなかロマンのある話だ。
そういえば。

こんなことが前にもあった。

あれは五月のこと。母の日に。

ここで蝸牛の少女とであったのだ。

いやはや。懐かしい。

そんな昔のことではないのに。それは遠い記憶の彼方のことのように。
う。

……それだけ、たくさんがあったということか。

激動の二ヶ月間。

蟹に出会い。

羽川と付き合うようになって。

蝸牛と行き遭い。

猿に襲われ。

蛇に噛まれ。

蜂に狙われ。

雛鳥を守った。

それ以前に遡れば鬼に出くわし、猫にもじゃれつかれている。

そのことを含めても、たったの三ヶ月だ。

たまには、こんな風にのんびりする日があっても悪くはない。

ああ、このまま眠ってしまうのもいいな。日差しは強いが、夕
オ
ルでも目元に置いておけば問題ない。風が気持ちいいこともある。

……全く、受験生にあるまじき贅沢な時間の使い方だ。

意識に霧がかかる。

眠りに落ちるまで数秒。

そんなの、漫画やアニメの主人公の特技だと真剣に思っていたの
だけだ。

……疲れているのかもしれない。

深く。深く。意識が落ち込んでいく。

瞼の裏に感じる陽光も、蝉の鳴き声も、吹き抜けてゆく爽やかな

夏風も感じない。

暗く静かな眠りへ

「ぎよえっ!?!」

そんな理想的な睡眠突入フェーズは唐突に破られた。

とてつもなく重い”何か”が僕にのしかかってきたのだ。

それも的確に僕のお腹を狙って!

半ば眠っていた僕に、その奇襲を回避する術はなく、その致命的な一撃を否応無く甘受させられるハメになった。∴ 懐事情の関係で昼食を取らずにいたのは正解だったのかもしれない。

くそっ、誰だ!

僕の甘美なひと時を邪魔しやがったのは!

「こんにちは、枕木さん」

八九寺だった。

悠々とベンチに寝そべっている僕のお腹に馬乗りになっているツインタールの小学生。ニンマリ顔のヘヴィロリータ。

「いろいろと突っ込みどころは満載だけど、一番大事なことを言うておくれ。僕の名前は阿良々木だ」

尻に敷かれマン。

羽川に頭が上がらないという意味では”枕木”という皮肉を否定しない。∴ できない。

更に現状、八九寺の下敷きだ。

「∴ あながち、噛めていなかったご様子で」

「やめる。僕を可哀想なものみたいな目で見るとはならない。それに尻に敷かれているわけじゃない。羽川が強すぎるだけだ。というか、いつまで跨っているつもりだ」

「いえ、深い意味はないのですが。どこかで見たことがあるような間抜けなアホ面が、どの面をさげてか昼寝と洒落込もつとしていたものですから、つい」

「つい、なんだよ」

「全力全開のハイジャンプからのヒップドロップを」

「殺す気か!？」

「この程度で死ぬようなら、阿良々木さんは既に百万回は死んでいきますっ」

「百万は言い過ぎだ。断固抗議するぞ」

「え? だって、阿良々木さんはちょっとした段差が下れないんじゃない? ありませんでしたか?」

「スペランカーかよ! っていうか、いい加減に退けよ! お前、重いぞ」

「レディに向かって重いとは失礼な! わたしが重いんじゃないかってリユックサックが重いだけです!」

ツインテールを逆立てて激昂する八九寺。

いやしかし。言っていることは至極まっとうであるようにも聞こ

える。自分の体重ほどもありそんな荷物だ。…一体なにが入っているというのか。

「分かったから、退け」

「おや？ お気に召しませんか。憧れの小学生が馬乗りなんですよ？ これで鼻息を粗くしないのなんて偽良木さんですよ？」

「小学生相手に興奮するか！ それと、わざわざ僕が毎回言いなおすからやめないんだろうが、僕の名前は阿良々木だ」

「それは失礼しました。わたしとしてはサービスのつもりだったのですが、お気に召さないというのであればやめましょう」

よいしょっ、と僕から降りる八九寺。

「阿良々木さんは、変わりましたね」

「そうか？」

「ええ、ようやく人並みです」

「僕の評価は一体どうなっている……」

「それを知ろうにも阿良々木さんには噂話に通じている友達がいませんから、知ることができませんけどね」

まあ、今までの素行を鑑みるに爆弾を抱えているのは間違いあるまい。

「そういえば、阿良々木さん」

「次はどうした八九寺」

「羽川さんとどつきあいをなさっているそうですが」

「お付き合い、な。この前どつかれたけど」

それも、今は呑気に笑っているこの場所で だ。

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ…」

「かみまみたっ」

「わざとじゃないっ!?!」

「間借りした」

…借りたのか、部屋を。その歳で。

そこには一体どれくらいの表沙汰にできない取引の数々があるの
だろうか。

少し興味ある。

「って、そんなテンプレはどうでもいいです」

「自分の持ちネタはもつと大事にしるよ!?!」

それじゃなくてもお前のネタは御題が難しいというのに!

「羽川さんとお付き合いするようになってからの阿良々木さんはな
んだか男前です」

「そ、そうか？」

見た目以上に大人な八九寺にそういわれるのはなんだかむず痒い。
しかし、思い返してみれば思い悩んだときに相談をするのは決ま
って八九寺だ。話しやすい、というのはもちろんんだけど、それ
以上にどこか頼もしい。

兄貴みたいなものか。…えらく子供ではあるけれど。

「まあ、ようやく人並み 見える顔になったというだけですけ
どね」

「…ちなみに、今までは？」

「底辺です。具体的にはモザイクをかけないと映像化できないくら
い酷いです」

そんなことだろうと思った。コイツがそう易々と人を褒めるはず
がないのだ。

「そんなことはともかく。阿良々木さんは羽川さんと正式にお付き
合いをされているんですね？」

「そうだな。先日、正式に」

…正式に、というのは僕がきちんと返事をして、という意味。

「ひとまず、おめでとうございます」

「えーっと、ありがとう?」

…どうにも調子が狂う。

「何度がお二人をお見かけしたことがあります。お邪魔するのもな
んですので、声は掛けなかつたのですが」

「ですが?」

「お二人はほんっとうにお付き合いをされているのですか?」

「信じがたいことだろうけど、事実だ」

そこまで疑われると僕まで自信がなくなってくるぞ、八九寺。

むしろ、僕がそんなだから余計に信じられないのかもしれないが。

「阿良々木さん。あなたの数少ない友人として忠告しますが、その
ような嘘はいくら羽川さんが寛大だからといっても良くないと思っ
ますよ?」

「付き合っているのを確認してきたのはお前なのにどうしてそう認
めたがらない!?!」

「だってあの羽川さんですよ!?! 完全無欠の人類の頂点に位置さ
れるお方がどうやったたらこんな小学五年生の女子に欲情するよう
な自称紳士、而してその正体は(略) みたいな人とお付き合いし
ているんですか! これならまだ本当は天動説が正しかったという
方がまだ納得できます!?!」

ふしゃー！ と威嚇するように八九寺は一気にまくし立てる。
…そうか。八九寺はまだ知らないのだ。

羽川の本当の姿を。

その弱さを。

そして八九寺の思いは、多分一般的な評価そのものだろう。

” どうして羽川があんな奴と ”

確かに、それは僕も思ったことだ。しかし、そんなことは些細なことだ。至極” どうでもいい”。

「なら、そう思っておけ。実はこの世界が誰かの夢物語であったとしても、僕と羽川は恋人同士だよ、八九寺」

どう思われているかは問題ではない。僕たちがどう思っているか
それこそが本当に大切なことなのだ、僕たちは知っているから。
僕たち二人だけが知っていれば良いことなんだから。

「……やはり、阿良々木さんは格好よくなりましたね」

「煽っても何も出ないぞ」

「それは残念です。アイス一年分くらいはたかれるかと思ったのですが」

「それは暴利過ぎるだろう……」

言葉一つで一年分のアイスとか……神原あたりの褒め殺しならできるとも思えないが。

「というか、八九寺。お前分かってて分かっててボケているだろう」

「バレましたか。でもそれがわたしのアイゼンキティーですから」

「…アイデンティティーな。鋼鉄製の白猫を模したマスコットキャラクターなんぞ恐ろし過ぎるぞ」

子供が泣く。

二十八番目の鉄人は鋼鉄製だが、アレはマスコットではないしな。

「しかし、あながち根拠がないわけでもないですよ、阿良々木さん。わたしはこのあたりを縄張りにお散歩しているので結構な数のカップルというのを見てきたという自負があります　　が、お二人は全くそうは見えないのでつい疑ってしまいました」

「僕たちが恋人らしく見えないというのか」

「正にその通りです！　高校生なんてさながら恋に恋するお年頃。そんなカップルが手の一つも繋がらないで、寄り道のひとつもせず、直帰なんてありえませんか！　二人っきりの部屋にいるのに勉強だけだなんてもつともつとありえないです！」

「一般論としてはそうだろうが…」

「特につ！　性欲の権化たる、小学生から高齢者までストライクゾーンしか存在しないような男、万年発動機の阿良々木さんが魅力的な羽川さんに手の一つも出さないなんて、天変地異の前触れでなければこの世界は末期の世界です！」

…いろいろと突っ込みたいところはあるんだが、それより僕は
前のテンションの高さに突っ込みを入れたい。

ふーっ！っつとやはり髪を逆立てて理性を失いかけている八九寺を
宥めて、改めて僕たちは向き直る。

「失礼、取り乱してしまいました。阿良々木さんを馬鹿にするのは
ともかくとして、羽川さんに失礼ですので一応謝罪しておきます。
ごめんなさい」

「あ、ああ…」

「でも 恋人同士に見えないというのは本当です。花の高校生活
彼氏、彼女の一人でもいれば絶頂期でしょうに。お二人からはそれ
が感じられません」

何処からどう見ても恋人同士には見えないのに付き合っていると
主張する男が目の前にいたとすれば、それはそれは不審に思うだろ
う。僕だってそう思う。

なるほど、八九寺が不可思議に感じるのも当然だ。

「羽川は真面目だからな。人目のあるところじゃ滅多にそういうこ
とはしないよ。お堅いくらいだけど、羽川らしいだろう？ だから、
折り目正しく公序良俗を守って清く正しいお付き合いさ」

「阿良々木さんが言うと、どうして嘘っぽく聞こえるのでしょうか、
すっごく不思議です…」

「…不本意ながら僕のその意見には賛成だ。えーと、つまりアレだ
よ」

「わたしは阿良々木さんの恋女房ではないんですから”アレ”とか”ソレ”では分かりませんよ」

くっ…。やっぱり羽川だけなのだろうか。突然”アレ”とか”ソレ”という指示語を使っても正確に言い当ててくれるのは。本当に底の知れない御方である。

「いつか話した”好きという感情は本来もつと積極的なもの”ってやつだよ。僕は羽川をずっと好きでいたいし、羽川にずっと好かれていたい。そのためにはありとあらゆる努力をしたいと思っているんだよ」

「…なるほど、そういうことでしたか。いやはや、信じ難いことですが、阿良々木さんをもう以前ののように馬鹿にはできませんね。そこはかとなく知性の輝きが見て取れます」

「僕はケモノかなにかだと思われていたのか…」

…前科者だから、否定できないけどな。

「言葉を解する、ですけどね。行き当たりばったりではなく、考えるようになったというのとは大きな進歩ですよ。今の阿良々木さんは格好良いです。哀の戦士ですっ」

「哀!? 愛じゃなくて哀なのかつ!? そんなに僕を殺したいか!」

「いえいえとんでもありません。わたしは嬉しいんですよ、阿良々木さん。羽川さんと並んで歩ける男になるために、日々努力しているらっしゃることを、わたしは知っていますから」

「えっ……」

ナニソレ。

「っつーか、ちょっと待て。なんでそこまでの事情をお前が知っている。」

「そういえば、さっきだって僕たちの行動パターンを正確に言い当てた上で指摘をしてきた。」

「八九寺は小学生にはいろいろなことを知っていたり小学生離れしたところがある奴だが、羽川のような言葉の端々から真実を推理し、組み立てるような能力は持ち合わせていないはずだ。そのことは、僕が一番知っている。」

「羽川さんから直接伺っていますよ、阿良々木さん。なんでも大変な頑張りようだったそうではないですか。危うかった成績も随分と上げられたと聞きました。おめでとうございます。」

「にぱっ、と満面の笑みで祝福してくれている八九寺。そこに邪気は全く感じられない。」

「それだけに、居心地が悪い。すこぶる悪い。」

「褒め殺しは神原のユニークスキルだし、素直な賛辞を送りつつもそれが皮肉ではないなど、まるで羽川ではないか。」

「それともなにか 今日の世界最後の日だったりするのかわ。それとも最終回？　もしかして、僕が死んでしまったりするのだろうか。」

「他意はありませんよ。毎朝、羽川さんが阿良々木さんの頑張りを教えてくださいますので、少し、影響されたかもしれません。阿良々木さんがお望みなら惚れてあげた方がいいんですよ？」

「そちらのご好意は丁重にお断りする。」

「流石は阿良々木さんです。本当に、本当に遅くなりましたね」

「…アイス一年分は無理だが、今日くらいなら奢ってやるから、どうだ？」

「…よろしいのですか？ お金がないのでは」

「余裕がないのは確かだが、アイスを奢ってやるくらいは問題ないよ。それに」

「…それに？」

「花札に付き合ってもらわなくちゃな。約束だったろ？」

「…よく覚えていましたね。そういうことならお付き合いいたしましょ」

「よし、なら善は急げだ」

すつくとベンチから立ち上がる。夕方までの暇潰しが見つかった。これで一人という現実にはまなくて済む。

一人が怖いなんて、克服する課題が増えたような気がするが。

「茨木さん」

「僕を音だけは関東の北東に位置するメロンの生産量が日本一の都道府県のような名前と呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「見直しました」

「テストかつ!? テストを見直したのか!？」

「いえ、阿良々木さんをです」

「僕が見直さなければならぬところなんてそれは山ほどもあるだろうが……一体どこを？」

「羽川さんと付き合うようになって、どんなに賢くなっても、わたしとのこんなつまらないお話に付き合ってくれる阿良々木さんです」

「はあ？」

「さ、早くいきましよう、阿良々木さん。わたしは早く冷たいものが食べたいです」

「あ、ああ」

……どうやら、僕は八九寺に過大な評価を頂戴してしまったらしい。いまいち良く分からないが、少なくとも悪いことではないのだろう。

それは羽川の居ない、ある夏の日のことだった。

あの夏の日（後書き）

今回は羽川さんはお休みです。

しかし、化物語のキャラは難しいですね。八九寺が変になってなければいいのですが。というか、羽川がいなくてこれほど書くのが難しいとは……。

なににせよ、お楽しみ頂けたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9115i/>

君の知らない物語

2010年10月9日18時09分発行